
真・恋姫無双～つながり伝～

茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双～つながり伝～

【Zマーク】

Z5560Q

【作者名】

茜

【あらすじ】

世界を旅する青年は三国志の世界に来た。
彼は、その世界のつながりを守りきれるのか。

すべては、天のみぞ知る。

茜「カツ」「良く言つてゐつもりなのでしょうか」

それって、カツ「悪いってこと?」

茜「はい」？悪氣なし

(・ー・)

茜「……」

主人公設定（前書き）

少し編集しました。

一度読んだ人、すいません。

では、どうぞ。

主人公設定

名前：姫神茜
ひめがみあかね

偽名：性、姫名、神字、刀赤真名、茜
き しんじ とうあか 真名あかね

性別：男

年齢：16歳（見た目） 実際：164423903歳（不老不死）

身長：165cm

体重：61kg

自由に変えれます

髪・赤と黒の間ぐらい（紅？）のセミロング

（モデルはアニメ【ハヤテの「ごとく」】のオリキャラ、姫神 茜です。三つ編みと仮面はなしです。性格はかなり違います。）

基本、誰にでも優しく人を受け入れる範囲が広いです。でも、例外はあります。（例：外道な悪人、つながりを断ち切る奴、ゲイ貂蟬）

武器・色々、基本は紅（刀）と零カーテ

強さ

神>茜>恋（呂布）>本気の鈴々（張飛） 愛紗（関羽）= 春蘭

(夏侯惇) > 紙

能力

つながりの力

ドラクエやFFでいうMP。別世界で様々な人たちと何らかのつながりをもつことによって使える力。時間があれば徐々に回復していく。用途は色々。

詳しくは本編で説明します。

主人公設定（後書き）

という感じです。

違いがわかりにくいでしょう。すいません。

次回、最初の仲間ができます。

青年 × 異世界 × 恋姫（前書き）

少し書き直しました。

ロボガリの四詞を少し分かりやすくしました。

自分で結構気にしてました。

では、どうぞ。

青年 × 異世界 × 恋姫

時は三国志、此処に一人の青年がいた。彼の名は「姫神 茜」。彼はこの世界の人間ではない。彼は、様々な世界を旅して「つながり」を守る者である。その他ならば、なんの躊躇い（ためらい）もなく人を殺すことさえできるのである。そして、彼は……

茜「此処は、どこのでしょつか？」

現状を理解していなかつた……

回想

茜「この世界でやる」とは終わりましたね……

ある草原で、茜は一人呑いて（つぶやいて）いた。

茜「…………」

茜は「この世界のつながりを守った。そして、新たなつながりを作った。

茜「ふふ、やまつづながつとはばらしきですね」

だからこそ別れは辛いものである。だが、茜の顔には悲しみの表情など微塵もない。

茜「さて、次の世界に行くとしますか『トロッブゲート』」

茜が一つの方向を指差してそこに「そこは茜の三倍はある黒い大きな穴が現れた。

【トロッブゲート】

つながりの力でそことは異なる別の異世界に行くための次元の歪み（ゆがみ）を作り出す能力。出る場所を決められないのが唯一の欠点である。

茜「さて、次はどんなつながりに出会いが楽しみですね」

意気揚々としながら穴に入ろうとしたその時、

茜の後ろから怒りと機械音がまじったようなハスキーな声が聞こえてきた。正確には斜め後ろから聞こえてきた。

そして声の人物は茜に向かつて飛び蹴り喰らわした。いや、喰らわせようとした。

スツ

だが茜は最低限の動きで飛び蹴りを軽くかわし…

ドット一ノ

声の人物は近くにあつた大岩に直撃した。

茜「いきなり飛び蹴りをして来るなんて、何のつもりですか？ロボガミ」

茜は少し呆れながら声の人物に聞いた。そこには、頭から茜そつくりの赤いセミロングを生やしたロボット、ロボガミが頭から煙を出しながら大音に突き刺さっていた。

バコッ

ロボ「何のつもりですか？」、ジャナイハコノアホガ（じゃないはこのアホが）！－オマエガイツタラワシハドウヤツテイセカイニイクンジャ（お前が行つたらわしはどうやって異世界に行くんだじゃ！－？）

11

自力で岩から抜け出したロボガミは茜に対して怒りをぶつけながら理由を言ひ。

茜「あつ」

ロボ「ワスレテタンダナ（忘れてたんだな）！－？？」

茜「いえ、忘れてませんよ。安心してください」

ロボ「サツキ（さつき）」「あつ」ティツタジヤナイカ（て言つたじやないか）！－」

茜「あれは貴方の存在を今思い出したんです」

口ボ「ヨケイタチガワルイワ（余計たちが悪いわ）－－！？？」

余りの怒りにもはや口ボガミは軽くオーバーヒートしていた。無理もない。何しろ先程まで目の前の人物に存在 자체を忘れられてたのだから。ちなみに口ボガミはこの世界の住人ではなく茜が作った戦闘ロボである。

茜「まあ細かいことは気にしないでください」

口ボ「コマカクナイ（細かくない）！」

茜「わかりましたから速くこきますよ」

口ボ「ツテ、オイ。ハナシワマダオワツテ（つて、おい。話はまだ終わって）」「ドンッ」ウガ！？」
ブォーン

茜は口ボガミの話しなど聞く耳持たず、有無をこわさず口ボガミを穴につきとばした。

茜「さて、私も行くとしますか」

ブォーン

そして茜も口ボガミに続いて穴入つていった。

ブオーン

茜「ふう、やつと抜け……」

茜の言葉は途中で止まつた。なぜなら……

チュンチュン チュンチュン

田の前で鳥達が楽しそうに歌つていたからだ。この時、茜の頭にある恐ろしい仮説が芽生えた。

鳥は本来そら飛ぶ生き物、だが今自分の前で鳥達が飛んでいる。そして足下に妙な浮遊感を感じる。そして茜は自分の最悪な仮説がははれてくれることを願いながらゆっくり足下をみた結果、

無駄だった事を実感した。ここまで時間0・05秒、といつわけ
で……

ピュー――――――

見事に落下中なわけです。

茜「いえ、落ち着くんです。」ついでにそ 冷静になつて考へるん
です」

さすがに無駄に長く生きているだけあつてこのぐらこのことなら冷
静でいられるようだ。

茜「「無駄に」は余計です」

すいません?

ちなみにまだ落下中です（笑）

茜「とりあえず試してみますか」

そういうと茜は右手を人差し指と中指を立ててそれを自分の額にあ
て、

茜『万華鏡』

突然3人に分身し、

茜『スイープ』

つながりの力となつた2人の分身を口から吸収した後下の方向を向
き、

茜「（今です）」

茜『姫神砲』（ひめがみほう）

ドガーネン

一気に放出して衝撃を押し殺して着地した。地面の姫神砲が当たつ
た箇所にはクレーターが出来ていた。

【万華鏡】

つながりの力で自分の分身を作り出す技。分身の能力は本体の10
分の1まで下がる。

【スイープ】

万華鏡で造られた分身を一定の箇所に吸収して強化する能力。口か
ら吸収することによつて姫神弾や姫神砲など技を使用できる。

【姫神砲】

口に吸収したつながりの力を高密度に膨張させて一気に放射する技。吸収した分身が多いほど威力が増す。分身一体で自分3倍はある大岩を破壊できる。

茜「ふう、助かりました」

何とか危機を回避してほっとしている茜。

茜「それにしても」

茜は周りを見渡した。

茜「…………」

茜「此処は、どこのじょつか？」

そこは辺り一面が荒野だった

回想終了

そして、現在にいたる。

茜「取りあえずまずは情報ですね。ロボガミはどう思いますか？」

茜はロボガミの意見も聞いてみるとした。が…

シ———ン

そこにロボガミの姿はなかつた。

茜「……」

茜「ひょっとして……時間差で入つたから出る場所がズレたのでしょうか？」

そう、茜はロボガミを穴につきとばした後に入つたからその小さなズレが穴の中では大きなズレとなつてしまつたのである。

茜「仕方ないです。とりあえずロボガミは後で探すとして、まずは「おい、兄ちゃん」？」

突然話しかけられたら茜はそちらの方を見るとそこには3人の賊のよつな風貌の男達がいた。

?「死にたくなかつたらそのめずらしい剣と服を置いてきな

リーダーらしき髭の男が言つた。因みに今の茜の服装は左右対称で執事服のような赤い服である。

茜「（この人達は、盗賊でしょうか？）」

? 「やいテメエ、アーキが置いてけつていってんだから置いてきやがれ！」

? 「おいでくんだなあ

今度はチビとデブの男がいつてきた。

茜「（この人達に生きる価値があるかどうか、確かめてみますか。）
ちよつといいですか？」

髭「ああ？」

茜「あなた達はみたどこの盗賊の用ですが何故こんな事をしてるん
ですか？」

茜がアーキと呼ばれていた髭の男に聞いた。

髭「そんなん楽しいからに決まってんだろうが」

アーキと呼ばれていた男はニヤニヤと笑いながらも当然のよう言
つた。

茜「（この人達に……いえ、ここに生きる価値はないですね……）
決めました。」

髭「ああ？」

茜「あなた達には、此処で死んでもらいます。」

そう言つと茜は左手に持つていた紅（刀）を抜刀してザシユツ

チビの男の首はねた。

二人「！」

茜「隙だらけですよ」

茜は紅を逆手に持ち直し、体をデブの男に向けると同時に

グシユツ

デブの首を切り落とした。

髭「チビー! テク!」

茜「後は貴方だけですね。」

そして茜はいつの間にかアーキと呼ばれていた男の後ろに回り込んで首に刀をあてながら言った。

髭「ま、待ってくれ！俺が悪かった！だから命だけは『嫌です』」

ザシコツ

茜がそう言つと同時にアーニキと呼ばれていた男は首を切り落とされて絶命した。

茜「来世では、良きつながりと人生を…」

茜は死体を見下ろしながら、静かにそういった……

茜「ん？」

死体を見下ろしていた時、妙な感覚が茜の心をくすぐった。

茜「…………」

「コンゴン

茜は無言のまま死体を調べていた。どうやら何かを探していくようだ。

茜「じれでしようか？」

すると茜は一冊の書物を見つけた。

茜「…………」

茜はその書物をじっと見ていた。

茜「（この書物から妙な力を感じますね、一体何なのでしょうか）」「

好奇心がそそられ、茜はその書物を開けたとしたその時、

茜「あ！」

突如強い風が吹き、書物は何処かへとばれてしまった。

茜「…………」

茜は無言のまま書物がとばれてしまった方向を眺めていた。

茜「まあいいでしょ、無くて困るわけでもありますし」

（じつやう前向こう背える）ことにしたよつだ。これが後に茜の新たな出合に導くのを、この時の茜は知らなかつた。

茜「さて、何時まで見てるつもりですか？」

茜が大岩の方を向きながら言った時

? 「おや、氣ずいておられましたか。一体何時からですか?」

岩の影から槍を持つた青髪の女性が出て来た。

茜「最初からです。少なくとも奴らに攻撃した時には既にいたはずです」

青髪「ほお? 気配を消していたのだが、いつも簡単に見破られるとは」

茜「いえ、確かに気配はに消えていました。ですがどんなに頑張つてもつながりの力は消しようがないですから」

青髪「つながりの力とは?」

聞き慣れない単語に青い髪の女性が反応した。

茜「人は必ず友達や家族、恋人などのように向うかのつながりがあるてそのつながりによって体からある一定の波動を放出しているんです。それがつながりの力です」

青髪「それは中々面白い考えだ。それでその事どどいつた関係が」

茜「私は、そのつながりの力を操る力もっているんです。隠れる事にきずいたのは貴方のつながりの力を感じ取つたからです。勿論そこにまだ2人隠れている事も、それが貴方の友達だという事もわかりますよ」

茜がさつきまで青い髪の女性が隠れていた大岩を指差して言つ。

青髪「…どうやらすべてお見通しのようだな。稲、風、どう思つ?」

すると、岩の影から 眼鏡をかけたいかにもクラスの委員長のような少女と頭に妙なオブジェをのせて口にペロペロキャンディをくわえた幼女に見えなくもない体格の少女が現れた。

眼鏡「嘘は言つてないようですが……にわかには信じられないですね」

オブ「ですが、風たちに氣づいておきながら何もしてこないと見ると、悪い人ではないと思いまーすー」

2人の少女は各自意見を言つた。

茜「ところで、一つ聞いてもいいですか?」

オブ「なんですかー?」

茜「あれば、一体何なのでしょうか?」

そういうつて茜が指差した方向には、遠くから数十名の人が 馬に乗つてこちらへ駆けてくる。

オブ「たぶん、この辺りの官軍ではないかと。これは面倒ですねー」

茜「何故ですか?」

眼鏡「訳あつて今わ見つかるわけにはいかないんですね」

茜「そうですか、でしたら一旦近くの町へ逃げましょ。話しの続きをそこでしますので」

眼鏡「すみません。巻き込んでしまって」

眼鏡の少女が茜に謝った。

茜「いえ、気にしないでください。寧ろ可愛い女の子に二人も出合えたんですから喜びこそそれ怒る理由などありません」

茜はとても爽やかな笑顔で言った。

青髪・眼鏡「————」

オ「ぐうー？」

茜「いや、起きてください。」

オブ「おおー？余りに歯の浮く口調に辟ひてしましましたー」

茜「いえ、可憐こものを可憐こと言つてなにが悪いんですか？」

オブ「…………お兄さんはまず自分の言葉の破壊力を知るべきなのですよー」

茜「？」

「のよつなやつとつをしながら一行は町に向かつて行つた。」この時、この3人こそがこの世界での最初のつながりとなる事を茜は知らなかつた……

青年 × 異世界 × 恋姫（後書き）

ありがとうございましたよ、つか？

自分ではましになつた方だと思います。皆さんからみて駄目だった
らしくません。

次回、仲間ができます。最後のオマケ、少しだけ変えました。内容
は同じです。

つながり×御使い×臣下の礼（前書き）

何とか書けました。

内容は全く変わりません。強いて云つなら以前と風の喋り方が微妙に変わっています。

オマケは少し変わりました。内容は変わってません。つまり少し口あります。嫌な場合はオマケを見ない事を進めます。
では、どうぞ。

つながり×使い×臣下の礼

その後、茜達はある町に着いた。だが、途中モタモタしていたせいか既に夕方になっていた。具体的には、茜が可愛いや綺麗などの単語を無意識に連発していたことが原因だが、茜自身は鈍感だったが故に気づくことはなかった。

そして現在

茜「とりあえずまずは宿を取りませんか？そこで色々話しますので」

茜が三人に提案する。因みに、まだ自己紹介もしていない ので三人の名前は知らない。

オブ「そうですねー、ではその時にお兄さんの事を根掘り葉掘り聞かせてもらいますー」

眼鏡「風！……すいません。後で言つて聞かせておきますので……」

風と呼ばれた頭にオブジェをのせた子を眼鏡をかけた少女が叱つて茜に謝つた。

茜「気にしないで下さい。自分が怪しい事は自分が一番わかつてますので。では行きましょう」

だが茜達は全く気にしていないかった。そして茜達は宿へ向かつた。

茜「せつかくですのでお代は私が出します」

宿に着いて部屋を取り扱とした時に、茜が言つた。

眼「そんな！それはさすがに失礼です」

だが眼鏡の少女もそれを拒否した。まあこの反応が普通である。何しろ自分達の分のお代をたつた今出会つたばかりの人人が払うといったのだから。

茜「いえ、私も皆さんには迷惑をかけてますからそのお詫びとでも

思つて下さい」

だが茜は何が何でも扱つ氣満々の用である。

眼鏡「ですが…」

オブ「稟ちゃん、お兄さんがここまで言つてゐるのですから」はお
言葉に甘えさせてもらいましょう」

頭にオブジエをのせた子が言った。

眼「……わかりました。ではお願ひします」

どつやら諦めたようだ。

茜「はい、では少々お待ちください」

やつと、茜はなにもない所に手を出した。

三人「「？」」「？」」「？」

三人もこの行動には不思議に思つたらしい。だが、次の瞬間

茜『クリエイト』

茜の手には握り拳一つ分ぐらいの大きさの金の塊が現れた。

三人「「「……」」

さすがに三人もこれには驚いた。彼らには宿のおじさんまで驚いている。

【クリエイト】

つながりの力で異空間に入れてあるものを出す力。異空間の中は無限に続いているのでいくらでも入る上にある一定の位置は時間が止まっているので食べ物を入れても永久に腐らない。

茜「どうあれ此れで足りますか?」

そういって茜わ金を おじさんに差し出す。

おじ「いや、こんな物貰えませんよ…」

やつこつとおじさんは金を突き返すとする。

茜「いや、このぐらこの物ならこぐらでもあつますので気にせねえ

け取つてください」

サラッと凄い」とを言つて再び金を差し出す。

おじ「そうですか？では…」

やつひつておじさんは金を受け取る。

茜「それでは行きましょう……つて、どうしたのですか？」

茜は振り向いて後ろにいた三人に話し掛けた。だか三人は未だに啞然としていた。

眼鏡「今のは一体なんですか？」

やがて正氣を取り戻した眼鏡の少女が聞いた。

茜「それも後で説明します。まずは部屋に行きましょう

そう言つて三人と部屋へ向かつた。

茜「では、説明の前にまずは自己紹介をしませんか?」

部屋に入つてから茜が言った。

青髪「そりどすな、私は趙雲、字は子龍と申す」

青い髪の少女、趙雲が言った。

茜「(趙雲? といつゝ)とは、此処は三國志の世界ですか。でも趙雲は男ではなかつたでしょ? つか?」

オブ「風は程立、字は仲徳といこますー、(Jつひぢは)宝慧ですー」

? 「よろしくな、兄ちゃん」

頭にオブジ^ヒをのせた少女、程立とその頭のオブジ^ヒ、宝慧が言った。

茜「(今、オブジ^ヒが喋つてましたが腹話術でしょ? それとも……)」

眼鏡「私は戯志才と申します」

眼鏡をかけた少女、戯志才が言った。

茜「（ん~）これは偽名ではないでしょうか？」

程立「それで、お兄ちゃんは何といつんですかー？」

偽名の事を不思議に思つてゐる時、程立が聞いてきた。

茜「あ、すみません。名前聞いて自分が名乗らないのは失礼ですね。
姫神 茜。それが私の名前です」

程立に言われた事を謝罪して、茜は自分の名前を言った。

趙「ほう、変わった名前ですね。性が姫、名が神、字が茜ですか
？」

茜「いえ、性が姫神で名が茜です。字はありません」

趙「字がないとは、ますます変わってますな」

茜「私がいたところでは普通でしたので」

趙雲の疑問に茜は答えた。

戯志才「では茜殿はどこから来たんですか？」

戯志才が聞いた

茜「そうですね。正直説明しにくいですが、強いてい「うならアソコからですね」

そう言つて茜は窓から空を指差して言つた。嘘は行つてない。実際茜はこの世界に来た時空から落ちてきたのだから。

趙雲「では姫神殿は天の国から來たのですか？」

茜の言つた事に趙雲が聞いてきた。

茜「当たらずとも、遠からずつて感じですね。ハッキリ言つと、私は異世界から來ました」

三人「「「異世界?」」」

茜「やはり最初から説明すべきですね。『クリエイト』」

そう言つて茜はいくつかの小さな球を出した。

茜「まあ、これがこの世界だとします」

そういうて球を一個置いた。

茜「そして次に、これが私がいた世界だとします」

そつ言つてもう一個球を置いた。

茜「こんな感じで此処とは異なる世界があるのです。とりあえず貴方達でいう天の国とでも思つて下さい、そして……」

すると茜は手に持つっていた球をすべて置きだした。

茜「こんな風に世界とは一つや一つではなくいくつもあるんです。こいまではいいですか？」

三人は頷いた。

茜「そして私があなた方に話したつながりの力ですが、私はこのつながりの力で様々な特殊な力を使えるんです」

程立「ではお兄さんが先程から手から色々な物だしていたのはその力ですか？」

茜の説明に程立が質問を投げ出す。

茜「そうです。因みにあれはクリエイトと言つてある場所に閉まつてある物を何時でも好きな時に出せる能力です。そうですね、趙雲さんは何か好きな食べ物はありますか？」

突然趙雲に質問する。

趙雲「好きな食べ物ですか？当然メンマですね」
そもそも当然の用に言つて趙雲に対し、戯志才はまたか、とこいつような顔をしている。

茜「メンマですか、では少々お待ち下さい。『クリエイト』」

するとメンマの入った壺が現れた。

茜「どうぞ、姫神家特性のメンマです」

そうこうして趙雲に壺」とメンマを差し出す。

趙「おおー。これは正しくメンマー姫神殿ーありがとうございます」

やつぱり趙雲はメンマを嬉しそうに食べぐる。

茜「とりあえず」んな感じです。他に欲しい物があつたら言つて下
れー」

茜がそつと、

程立「それじゃ あ風は飴が舐めたいですー」

趙雲「なら私は天の国の酒を」

程立と趙雲が思いつきつ食い付いてきた。

戯志才「ほら星！風！そんなに色々頼んでは「はい、えりか」と、
もつぱしたんですか！？」

茜の余りの手際よさに戯志才は思わずツッコんだ。

茜「とりあえず食べながらでいいので、続きを聞いて下せー」

そう言って続きを語り出す。

茜「やつせるよひにひつながりの力は様々な能力を使えるのですが、
その中に異世界に行ける能力があるんです。私はそれを使って色々
な世界を旅して回っているんです」

三人は茜の話しが食い入るように聞いていた。

程立「ではお兄さんは何故旅をしてるのですか？」

程立の「」の言葉に他の一人も茜が旅をしている理由が気になつた。

茜「つながりを……守るためです……」

茜は静かに言った。

茜「私は多分全ての世界の中で一番つながりの事を知っています。それ故に……つながりを失った時の悲しさも知っています……だからこそ、その悲しみを他の人に受けてほしくないんです……」

三人は静かに聞いていた。

茜「だから私は旅をしているんです。私自信の手で、つながりを守るために……」

戯志才「では、この世界へ来たのも」

茜「はい、つながりを守る事です。そして、それにはこの世界を平和にしなくてはいけません」

三人「「「……」」」

茜「此処がどういう世界なのは既にわかっています。この世界のつながりが失われる原因は混沌の世の中、つまりこの世界その物です」

そう、此処が三国志の世界ならつながりが失われる一番の理由は戦争による死、そして世界その物が腐っているのが戦争の原因なのだ。

茜「世界その物が腐っているのならば……私がこの混沌の世の中を平和へ導きます。つながりを……守るために……」

これを聞いた三人は考えが一つになった。

趙雲「稟、風。」

戯志才「はい。」

程立「わかつてますよー」

趙雲が一人に確認するように聞いた。

茜「私の話しあは、これで終わりです。何か質問はありますでしょうか。」

茜が三人に聞いた。

趙「質問ですか。では、姫神殿」

スツ

茜「！」

茜は驚いた。何故なら、先程まで自分の話しひを聞いていた三人が突然臣下の礼を行つたのだから。

趙雲「我らにその大役、手伝わせてもらえぬでしょうか？」

その言葉に、茜はさらに驚いた。

茜「理由を聞いても宜しいでしょうか？」

とりあえず、理由を聞いてみた。

趙雲「実は今、都ではある噂流れているのです

茜「噂？」

戯志才「自称大陸一の占い師、管轄の預言で『天より流星が舞い降りし時、紅き衣を纏いし者現る。その物は、異能の力で乱世を平和へと導く天の御使いである』といった物です」

程立「風たちは流星が落ちるのを目撃してそれを確かめに行たらそこでお兄さんに会つたのです」

戯志才「貴方のその見た事のない紅い服に特殊な力、正直私たちは貴方が天の御使いではないかと思つていました」

趙雲「そして先程の言葉で確信しました。貴方こそが我らが仕えるべき方で、この乱世を平和へと導く天の御使いだと。ですから我らは貴方に仕えようと思つたのです。我らは今より、貴方様を主として貴方様の家臣として仕えることを誓つ。どうか我らを…お側に置いて頂きたい」

その言葉を最後に三人は頭を下げた。

茜「なる程、貴方たちの気持ちはよくわかりました。ですが、私は部下はいりません」

その言葉に、三人はとても落胆したが、

茜「ですが、同じ志をもつ仲間というつながりは欲しいと思つてい

ます。私とつながりを持つてくれませんでしょうか?」

茜の「」の言葉に、三人の顔に再び輝きが戻った。

三人「「「是非よろしくお願ひします（しますー）ー.」」

茜「はい、よろしくお願ひします趙雲さん、程立さん、戯志才さん」

趙雲「主、私の事は星とお呼び下せ。我が真名で『』ぞこまく」

程立「風の真名は風と風のひのですー」

戯志才「茜殿、実は私は訳あつて偽名を使つていきました。改めて名乗らせて下せ。」

戯志才が頭を下げながら言つた。

茜「やはり偽名でしたか」

星「気が付いたのですか?」

茜「はい、名乗る時言い慣れてなによつた気がしたのでやつではないかと思つたんです」

戯志才「全てお見通しの用ですね。では改めて、私は郭嘉、字は奉孝、真名は稟^{りん}です」

改めて郭嘉こと稟が名乗った。

茜「はい、お願ひします。とにかく、一つ聞いてもよいですか？」

稟「何ですか？」

茜「先程から言つてこゐる真名とは何ですか？」

茜は自分の聞き慣れない単語について聞いた。

稟「真名を知らないんですか？」

茜「はい、聞いたことのない単語です」

とりあえず説明する事にした。

稟「真名というのはその人の本当の名でとても神聖な物で自分が許した者だけが呼べるんです。許可無く呼ばば問答無用で殺されてもおかしくないのです」

茜「そんなに大切な物を私に預けて貰えるとは嬉しい限りです。できれば私も渡したいのですが、私には真名が無いんです。強いていうなら茜と言うのが私の真名だと思います」

これを聞いた三人は 目を見開いた。

星「では、いきなり真名を許されたのですかー？」

茜「まあそう言つてになりますね。ですが名乗るたび驚かれるのもどうかと思つてこの世界では一時的に名前を変える事にします」

稟「わかりました。それで、何と名前にするんですか？」

茜「そうですね、では読み方を変えて性は姫さち、名は神しん、字は刀赤とうせき、
真名は茜あがねにします。因みに字は今思い付いた物です。好きに読んで下さい」

星「私は主と呼ばせて頂きます」

風「風はお兄さんと呼ばせて貰いますー」

稟「では私は茜殿と呼ばせて貰います」

茜「はい、これからよろしくお願ひします。（一ノ口シ）」

茜は再び爽やかスマイルを無意識に発動した。

三人「「「――」」」

どうやら効果は抜群のようだ。

「うして、茜はこの世界で最初のつながりを手に入れたのだった……

オマケ

星「そう言えば、主には好きな人はいますか？」

それは唐突な質問だつた。そして稟や風もこの質問に反応していた。
どうやら一人も興味津々のようだ。

茜「私はみんな好きですが？」

さも当然のように言った。

星「言い方が悪かったです。恋人はいますか？」

今度は茜にもわかるように言った。

茜「ああ、そっちの意味ですか。もちろんいますよ、それもかなりの人数ですね」

星「なんと…」

稟「予想外の答えです…」

風「英雄色を好むとは、お兄さんの事を言つのでしょうか？」

茜「恋愛も恋人というつながりに関係しますからね、世界を旅してつながりを作つてゐうちにかなりの人数になつたんですよ」

風「なるほどー、そういう事ですかー」

星「ではこの世界では？」

茜「私がこの世界で最初に出会つた女性が貴方達なんです。いるほうがおかしいです」

これを聞いた三人は…

星「そりですか！」

風「風は安心したのですよー」

星と風は顔に輝きが戻り。

稟「これは私達で茜殿を奪い合つてそして最後は四人で.....ぶは
！」

稟は妄想が暴走して とてつもない量の鼻血を吹き出した。

茜「稟は一体どうしたのですか？」

風「何時もの事なのです。はーい、とんとんしますよー」

トントン

稟「フガフガ」

風が首筋を指で叩くと稟は復活した。

茜「なるほど....妄想ですか.....」稟

ダキ

すると茜は突然稟を抱き寄せた。

稟「なつ／＼茜殿！？／＼／」

茜「私は稟さえよければ構いませんよ…」

茜はそう言ひて稟を優しく抱き締め、

稟「／＼／」

稟は惚けていた。

風「なんだかお兄さんの様子が先程と打つて変わつて違いますね～」

星「どうやらコレが原因のようだぞ」

そう言つて星がさしたのは、先程茜が飲んでいた酒だつた。実は話が終わつた後、星たちは茜と酒を飲んでいたのだが、茜はまだ一口か二口ぐらいしか飲んでいなかつた。

茜「お一人も」

ダキ

星・風「…………」

すると茜は星と風も抱き寄せた。

風「おっ お兄さん／＼／＼

茜「私は稟だけでなく…星や風ともそういう関係をもちたいと思つてます……お一人は、嫌でしょ？」「

星「いえ…／＼／そういう訳では…／＼／＼

茜は普段は鈍感であるが、とてもないフラグ体質とフロモン体质を持ち合わせている。

因みにフェロモン体質のスイッチは普段は抑えられているのだが、茜が酒を飲むと精神が弱まりその抑えが無くなつてスイッチが入り簡単に女性を落とせる用になるのだ。

当然、スイッチの入つた茜に三人がかなう筈もなく、既に三人は落ちる寸前である。そして…

茜「私と、恋人としてのつながりも持つてくれませんでしょうか?」

茜が耳元で言ったこの一言で、

三人「はい／＼お願いします／＼／＼

三人は完全に落ちた。

翌日、茜が自分の隣で裸で寝ている三人少女を見て、

茜「また…やつてしまひました……。」「

と嘆いていた。

つながり × 御使い × 陛下の礼（後書き）

とこの感じです。

内容はこれからも変えないつもりです。これだけのために書き直してすいません。

次回、旅に出ます。内容はやはり変わってません。すいません。

オリキャラ設定（前書き）

ロボガミの説明少し変えました。

他は変えてません。

では、どうぞ。

オリキャラ設定

名前：ロボガミ

性別：男？（ロボ）

年齢：2135023歳（造られてからたつた年数）

身長：165cm（茜と同じ）

体重：不明（かなり重い）

髪・茜と同じ（何故がある）

（モーテルはゲーム【GUTHLTY GEAR】のロボトイです。）

茜が自分をモーテルに作った戦闘ロボ（という設定）。ロボットのヒメガミだから、ロボガミ。自立機能を付けた結果、特徴的な喋り方をするようになった。色々な世界を茜と共に旅している。この世界では茜とは別の場所に落ちている。

武器・仕込み武器

例：指には銃、手首には小型爆弾

強さ

茜×恋（呂布） ロボガミ 本気の鈴々（張飛）

能力（機能？）

幾つかのコミッターがあり、解除する事によって一定の必殺技を用出来るようになる。解除するには茜の許可がいる。

【メルトダウン】

リミッターを一つ解除することによって使用可能、エネルギーを暴走させて十秒後に自分を中心に半径二百メートルの大爆発を起こす。要するに自爆。使用後には、リカバリー モードが自動的に起動して最低二十四時間（一日）たたなければ起動出来ない。

【リカバリー モード】

ロボガミがエネルギーを充電するための充電機能。一時間で三時間分の充電ができるが、太陽の光を浴びている時は効力が二倍になる。起動中は動けないが、起動中に首筋のボタンを押す事によって充電した分だけ起動する事が出来る。充電が満タンになつたら自動的に起動する。

詳しくは本編で。

オリキャラ設定（後書き）

充電についての説明が少し変わってます。

喋り方は変えないつもりですが、わかりにくいので少しほんの少しありや
すくします。

嫌わないで下さい。

できれば僕も……

力×旅立ち×つながりの誓い（前書き）

取り敢えず書けました。

一応自分なりに工夫はしています。ただそれが帰つて逆効果になるだけです。すいません。

では、どうぞ。

力×旅立ち×つながりの誓い

前回、三人の少女達と仲間としてつながりを持つた茜。（恋人としても持つた）現在彼等は町の外にいる。何故なら……

回送

茜「今日は三人の特殊能力を調べてみます」

三人「「「特殊能力？」」」

それは、唐突に言われた事だった。

茜「はい、昨日は言い忘たのですが、私とつながりを持った人はある特殊能力を使える用になるんです」

星「それで、その特殊能力とは何ですか？」

茜「それは私にもまだわかりません。ですが、特殊能力はその人に最も合つた物になります。今までかそうでしたので」

これを聞いた三人それぞれ瞳を輝かせた。

茜「とりあえず今日はその特殊能力を調べて見ます。とりあえず私

は準備をしておるので三人は町でも見て回つて下をこ。そして一刻後に町の外へ集合です。では

そつ言つて茜は何処かへ歩いて行つた。因みにこの一刻の間、風は町の書店で蔵書を読み漁つており、星は昼間から酒とメンマを楽しんでいる所を裏に見つかつて説教された。それと、酔いが抜けきつて無い用だったので茜が『セラピー』を使って醒ましておいた。

【セラピー】

つながりの力を相手の体に注ぎ込んで怪我や病気などを癒やす力。注ぎ込む量が多くれば多いほど難病や重傷な怪我も治せる。

(酔いを醒ますのは微量ですんだ)

回送終了

茜「ではまずは星からこします」

やつて星の星に向く。

星「それで、一体どうやって調べるのですか?」

茜「ううんです」

そう言いつと茜は、自分の顔を右手でおおい 右目だけが見える状態にした。

茜『サーチアイ』

そいついつと茜の右目が大きく見開かれた。

茜「…………」

そして三人を見続け、そして…

茜「わかりました」

見開いていた右目を戻して手をじけながら言つた。

稟「今のは何をしたんですか?」

茜「貴方達の能力を調べました」

風「お兄さんは万能ですねー」

茜「一応私にも出来ない事はあるんですが……まあいいでしょう。」

【サーチアイ】

自分とつながりを持つた人を見る事でその人の特殊能力がわかる力

茜『クリエイト』

すると茜は自分の隣に大きな鉄の壁を出した。

茜「では星、これを貴方の龍牙（槍）で全力で突いて下さい」

茜は鉄の壁を指差しながら言った。

星「そんな事をしたら龍牙が傷ついてしまいますか…」

茜「大丈夫です。私を信じてください」

星「…わかりました。主を信じましょ」

そう言って星は龍牙を構えて、

星「はあああああああああ！」

鉄の壁に向かつて鋭い突きを放った。そして次の瞬間、

シユバツ

星「な！」

星は驚いた。何故なら、厚さ十五センチはある鉄の壁がまるで紙のように簡単に貫かれたのだから。

星「主…これは一体……」

茜「これが貴方の能力、『貫通牙』（かんつうが）、鉄をも貫く脅威的な突きを放つ力です。きっと貴方は突きを主体とした戦い方をしてたんですね。これなら武器」と敵を貫く事ができます」

これを聞いた星は目を輝かせた。

茜「喜んで貰えたみたいでなによりです。では次は風の番です」

風「わかりましたー。それで、風はどんな能力が使えるのですかー」

茜「その事ですが、風は立つたまま寝る事ができますよね。今も寝ることは出来ますか？」

風「試してみますー」

そう言って風は田を閉じた。

茜「…………」

風「…………」

茜「…………」

風「ぐう～？」

茜「寝たみたいですね」

風「寝てませんよー」

ビーツやら寝てなかつたよつだ。

茜「いえ、本当に寝る必要はないのです。寝たフリでも効果はありますので」

風「それで、これには何の意味があるのですかー？」

茜「自分の手を見て下さー」

風「? 何ですかこれは?」

風の手には小さな球が一つ握られていた。

茜「それはこの子が教えてくれます。『クリエイト』」

そう言つて出てきたのは、

稟「犬？」

星「犬だな……」

風「犬ですねー」

そう、茜が出したのは一匹の犬だった。

茜「町を歩いてる時に偶然すり寄つて来たので協力してもらう事にしました」

犬「ワン」

稟「それで茜殿、この犬に何を協力してもらつんですか？」

茜「たいした事ではありません。風、その球をこの犬にあててください」

風「こいつですか？」

そう言つて手に持つていた球を犬にあてると、

プシュン

球が何の前触れもなく突然消滅し、

犬「く~、く~？」

犬は寝息をたてながらぐつすり寝ていた。

茜「さつきの球は『睡眠呪』（すいみんじゅ）と言ひて自分以外の者が触つたら その触った相手をこんな風に深い眠りに誘う呪いをかけて、一週間何があつても起きなくなるんです。私も使えますが私の場合は眠らないと作れません。ですが風の場合は本当に寝て無くとも作れるらしいですね」

風「なるほどー」

ビービー やら納得した用だ。

茜「これは結構使えますよ。敵の進路に置いておけば踏むだけで敵の戦力を一時的に減らせますし、ばれたとしても球に気をつけて進む事によって進行を遅ぐする事ができます。実際そうでしたので」

風「おおー、勉強になりましたー。といひでお兄さん

茜「何ですか？」

風「いひうるの犬はどうあるのですか？」

未だに寝ている犬を見ながら言った。

茜「そういえば考えてませんでしたね、とりあえず後で町に連れて行つて、呪いを解いておきます。では最後は稟ですね」

茜が稟の方を向いて言った。

稟「はい」

茜「まずは準備ですね、稟、私が今から言ひ事を何も言わずに聞いて下さい」

稟「分かりました」

稟がそう言つと、茜が稟に近づいて、

茜「ボソボソ……」

稟だけに聞こえる声で何か言い出した。

稟「……」

茜「ボソボソ……」

稟「…………」

茜「ボソボソ……」

稟「…………ふはつー」

すると稟が突然鼻血を吹き出して倒れた。

茜「風、お願ひします」

風「はーい稟ちゃん、とんとんしますよ、とんとんー」トントン

稟「ふがふが……」

『ひつやひつ復活したよ!』だ。

茜「とりあえず準備は整いました」

星「鼻血を出す事が準備だったのですか?」

茜「当たリですが、はずれです。正確には血溜まりを作る事です。

『クリエイト』

『いついつと茜は血が入った瓶を一つとマネキンを一体出した。すると茜は瓶の中に入った血で血溜まりを作り、マネキンを一体は自分の、もう一体を稟の血溜まりの上に置いた。』

茜「三人共血溜まりから離れてください」

茜に言われて三人は血溜まりから離れた。

茜「ではまずは私がやります。三人共血溜まりを見て下さい」

三人が視線を血溜まりに向けるのを確認すると、茜は自分の血溜まりを見ながら言った。

茜『血の池地獄』

グサ！グサ！グサ！

すると血溜まりから 無数の武器が出て来てマネキンを串刺しにした。その後無数の武器は血溜まりと一緒に消えていった。

茜「これが貴方の能力、『血の池地獄』です。自分の血で血溜まりをあらかじめ作つておく事で血溜まりから無数の武器が出て来て、上や近くにいる者を串刺しにする力です。試しにやって見て下さい。使い方は、『血の池地獄』と一緒に下さりだけです」

稟「わかりました」

そう言つと稟は自分の血溜まりを見て、茜の言つ通りにやつた。

稟『血の池地獄』

グサ！グサ！グサ！

その結果、茜のようにもマネキンを串刺しにした。

茜「完璧です。因みに用途は風の『睡眠呪』と同じですがこつちは無力化ではなく殺すことを主体にした物ですし使用には必ず血を流さなくてはなりませんが、稟の場合は鼻血を再利用出来るので丈夫だと思います」

星「確かに」

風「ですね~」

稟「正直その部分に関しては複雑な気持ち何ですが……」

全員に肯定された事によつて、稟の顔は若干引きつっていた。

茜「それと突然ですが、私は三人とは別行動をとらせてもらいます」

これを聞いた三人は、

星「どうこう事ですか主！」

稟「私達とは……一緒に居たくない」という事ですか？」

風「風達に手を出しておきながらいきなつさよならはないと思いま
す」

各自の意見をぶつけた。

茜「言い方が悪かったです。暫くの間旅に出て後で合流します」

稟「どうこう事ですか？」

その後茜は未来から来た事、三人は史実に残っている事、この後起
じる黄巾の乱の事などを詳しく話した。

茜「というわけです。そして私は旅に出て見聞を広めながら更なる
仲間と拠点となる場所を探そうと思っているのです」

星「拠点はともかく、何故仲間をさがすのです？主は我らに不満が
あるのですか？」

茜「いいえ、確かに三人はとても素晴らしいです。ですが、私達だけではこの世界を平和にするのはかなり難しいので更なる仲間が必要なんです。それに仲間が増えれば三人がその分楽になります。三人の事を思つてこそ仲間さがしもあるんです」

茜の言葉に、

星「主が我らの事をそこまで思つてくれているとは、わかりました。私はもうなにも言いません。二人はどうする?」

風「風も異論はありませんー」

稟「二人が賛成して私だけ反対するわけにもいかないでしょ?」

結果三人共許してくれた。

茜「ありがとうございます。では三人にはどこの諸国に、とりあえず幽州の公孫贊さんあたりで密将として働いて黄巾党と戦つて下さい」

三人「「御意(です)」」

茜「それと三人に渡して置くものがあります。『クリエイト』、これです」

そつ言つて茜が渡したのは、腕輪と指輪がそれぞれ三つずつだった。

風「これはなんですか~?」

風が聞くと、茜は腕輪を手にもつた。

茜「まずは腕輪ですが、簡単に言えばリミッターです」

三人「リミッター？」

茜「横文字はわからないみたいですね。要するに封印です。この腕輪を付けている間は能力を抑える事が出来るんです」

星「何故役に立つ能力を封印する必要があるのですか？」

茜「でしたら聞きますが、星は手合わせや調練の度に武器を壊すつもりですか？つまりそういう事です」

茜の言葉に星は納得した用だ。

茜「それと稟と風は鼻血と睡眠呪を瓶か何かに入れて残しておく事をお勧めします。特に血は出し過ぎたら命の危険がありますから少しずつためておいた方がいいです」

稟「はい」

風「わかりましたー」

茜「とりあえず腕輪の説明は以上です。次に指輪ですが、これは私の手作りで特に何もありません。強いて云うなら、つながりを持った仲間の証みたいな物です」

そう、茜は集合までの一刻の大半は「この指輪を作るために使ったのだ。そしてよく見るとその三つの指輪はそれぞれ大きさが違つて三人の真名が彫つてあつたのだ。これを見た三人は、それぞれ指輪を自分の指にはめた。

稟「茜殿のお気持ちはしっかりと伝わりました」

風「風はお兄さんに惚れ直しましたー」

星「大切にしますぞ、主」

三人はとても嬉しそうな笑顔で言つた。

茜「はい」

すると茜は自分の指にはめてある指輪、空向け、三人もこの意味がわかつたらしく三人も同じ用に指輪を空向けた。

星「この指輪はつながりの証」

風「例え離れていても」

稟「この指輪がある限り」

茜「つながりは永遠に繋がり続けます」

全「「「「我々は四人はつながりを持つて世界を平和へ導く事をこの指輪に誓つ」」」

こうして四人は、つながりを持つて世界を平和へ導く第一歩を踏みだしたのである。

力×旅立ち×つながりの誓い（後書き）

次回、アイツに再開します。

いきなりですいません。一応ウケ狙いのつもりでした。

多分滑りました。すいません。次は頑張ります。

再開×出張ご×観なの撮影（前編）

とつあえず投稿してみました。

前の奴よりロボガミの単語が少しだけ増えています。

では、どうぞ。

再開 × 出会い × 更なる誓い

星、風、稟の三人との誓いを後、茜は旅に出た。

因みにあの犬はちゃんと茜が起こしたのだが、旅に出ようとした茜について来る気満々だったので全力で走る事でなんとか振り切つた。余談だが、この時三人の少女が犬から必死に逃げる茜の姿をニヤニヤしながら見ていたとかいなかつたとか。

途中、何度か賊に襲われたりもしたが、ただの賊が茜に適うはずもなく、賊は皆返り討ちにされた。

旅をしてから一週間、茜はある町に立ち寄ったのだが、

茜「なんですか…?」
「これは……」

家は荒らされ、物が散乱して怪我人も大勢いてほぼ壊滅状態だった。

茜「ん？あれは……いえ、まずは怪我人の治療ですね……」

茜はある物を見つけたが、後回しにした用だ。

茜「しつかりして下さい、今助けます。『セラピー』」

茜は近くに倒れていた青年をセラピーで治した。

青「…………うう、俺は……助かったのか？」

茜「はい、怪我は私が治しました」

青「本當か！？頼む、みんなを助けてくれ！俺に出来ることなら何でもするから！」

青年が頭を下げながら頼んだ。

茜「わかりました。でしたら村にいる怪我人を全員、町の中央に集めて下さい」

青年「わかった！」

そう言つと青年は走つて言つた。

しばらくして、町の中央には、たくさんの怪我人がいた。

茜「（これはセラピーでは効率が悪いですね。『アレ』を使いますか…）」

すると茜は怪我人達の前に移動して両手を怪我人達の方へ向けて、

茜『オールヒール』

怪我人全員に能力を使つた。

男1「うう…」

男2「痛みが引いていく…」

男3「これは一体…」

町人達は、傷が勝つてにふさがっていくのを不思議に思っていた。

【オールヒール】

怪我を治すことを主体とした能力。一人に集中するセラピーと違つて、複数の人を治せる。

茜「治療完了」…

茜が小さく呟いた。

茜「皆さん、まずはおちついてこちらに注目して下さい」

茜がそう言つと、町人が全員茜の方を向いた。

茜「成り行き上助けましたが、まずは状況を説明してください。一体何があつたんですか？」

茜のこの疑問に、町の人が説明してくれた。曰わく、この村は黄巾党に襲われたらし。それも一度や一度ではなく、官軍も見て見ぬ

ふりをして終いにはこの町の県令も逃げてしまつたらしい。

男1「俺達にもう戦う力はない…………」

男2「これから俺達はどうすれば…………」

村の人達は既に希望などなかつた。

茜「…………」

これを見た茜は、

茜「生きるんです…………」

村人達に向かつて静かに言つた。

茜「皆さんのが生きている今は、殺された人達も生きたかつた今です。ですが、皆さんの中には殺された人に助けられて生きている人も大勢いるはずです。それは皆さんに生きて欲しかつたからです、皆さんはその人達の思いを踏みにじるつもりですか？」

男1「そんなわけないだろ！本当は俺達だって悔しいぞ！」

男2「でもどうしようもないだろー。」

男3「金も食べ物も殆ど無いのに、一体どうやって生きるっていうんだ！」

町人達は茜に反発した。町人達に言われた通り、食糧や金田の物の殆どは黄巾党の奴らに持つて行かれた。だが茜はそれを直ぐに理解し、

茜「その事なら私がなんとかします。『クリエイト』」

たくさんの金塊や食べ物を出した。

茜「此処にお金も食べ物もあります。これを使って下さい」

人達は驚いた。田の前の男が突然金や食べ物を出してそれを自分達にくれると言つたのだから。

茜「とにかく、まずは生きてください。殺された人達の分まで、皆さん生きるんです」

男1「貴方は、一体……」

一人の男の問いかけに、

茜「性は姫、名は神、字は刀赤、通りすがりの天の御使いです」

茜は答えた。

男1「天の御使いつて確か、今噂の……」

男2「そう言えば噂通りの格好だしさつきも突然ものを出したよな」

男3「まさか、本当に……！」

村人達が茜の言つた事に各自の反応をしていたその時、

?「大変だ――――！」

茜が最初に助けた青年が走ってきた。

茜「どうしたんですか？」

青「黄巾党の奴らがまた来たんだ！」

この言葉に、町人達は動搖した。

茜「皆さん落ち着いて下さい。黄巾党は此処には来ません。」

青「何言つてゐるんだ！黄巾党は確かにこの町に向かつて來てるんだ！」

茜「確かに黄巾党の狙いはこの村でしょう。ですが黄巾党がこの村に来る事はありません。私が行かせませんので」

これを聞いた青年や町人達は、何言つてんだコイツ、といふような目で茜を見た。

茜「私が黄巾党を倒し、この町を救います」

男3「でも、いくら天の御使いだからって、たつた一人で黄巾党に勝つなんて「できます」えつ？」

茜「私は世界を平和に導く天の御使いです。町一つ救えない者に世界を救えるわけありません。それに、私は一人ではありません」

青年「どういう事だよ？」

茜「この町の入り口付近に変な物がありましたよね？アレこそが私の仲間です。今は眠つている用ですが私とアレだけでも賊の一万や二万は余裕です」

男1「マジかよ…」

男2「俺達、助かるじゃないか…？」

茜「助かります…何故なら皆さんには天がついているのですから…」

そう言つと茜は町の入り口付近に向かつた。

茜「やはり電源がOFFになつてしましましたか」

町の入り口付近で、茜はある物をいじついていた。

茜「とりあえず動かしますか」

やつぱりそのある物の電源をONになると、

そのある物、ロボガミが動き出した。そう。茜が言っていた仲間とはロボガミの事である。

茜「久しぶりですね、口ボガミ」

「ボーナツ、アカネ（なつ、茜）！キサマ、サツキハヨクモ（貴様、さつきはよくも）」「今はそれどころではありません」ン？」

茜「早速で悪いですが、仕事です。状況は後で説明しますので手伝つて下さい」

口ボイ：ナニカワケガアルノカ（何か訳があるのか）」

茜 はい・

日赤・シカゴドーム（住事内密）…………?

西賊の殲滅です」

「……ソウカ、ワカツタ（そつか、わかつた）。アトデチャントセツメイシロヨ（後でちゃんと説明しろよ）」

茜「はい、では行きましょう」

そう言つて二人は賊の方へ向かつていつた。

茜「止まりなさい」

? 「ああ？ だれだテメエは？」

茜達は今、黄巾党の前にいた。

茜「そんな事は関係ありません、单刀直入に聞きます。あの町を襲つたのは貴方達ですか？」

黄巾「ああそうだが？ それがどうしたんだ？」

黄巾党の男は隠す事も無く笑いながら言つた。

茜「口ボガミ……」

ロ「イマダニジヨウキヨウガワカラソガコイツラガクズダトイウコトハワカッタ（未だに状況はわからんがこいつらがクズだという事

はわかつた）。ソレニアカネ、テキハコイツラカ（それで茜、敵は
こいつらか）？」

茜「はい…」

茜は静かに言った。

茜「『サンクチュアリ』、範囲、私達と黄巾党の半径一百メートル
以内」

そう言つと、茜達と黄巾党を中心に半径一百メートル以内に結界が
張られた。

【サンクチュアリ】

指定した範囲に戦車でも破壊できない強力な結界を張る能力。

黄「な、テメエ！なにしやがった！」

茜が結界を作つたことに黄巾党達は混乱していた。

茜「気にしないで下さい。例え気にしたところで、今から貴方達が死ぬ事に変わらないんですから……」

いつの間にか茜はとても濃密な殺氣を黄巾党達にぶつけた。

黄「ひつ……」

当然、黄巾党達が茜の殺氣に耐えられる筈もなく、その殆どが恐怖で震えていた。

茜「口ボガミ、今回の目的はあくまでも殺すことです」

ロ「ツマリ、テカゲンナシテナグッテモイインダナ（つまり、手加減しなくてもいいんだな）？」

茜「はい、けして慈悲をあたえてはいけません。確実に全員殺すんです」

ロ「アカネガソコマデイウトハナ（茜がそこまでいふとはな）」

そう言って口ボガミも黄巾党達を見据える。

茜「行きますよ、口ボガミ……」

口「オオ！」

そう言つて二人は黄巾党に向かつて突つ込んで言つた。そこからは一方的だつた。茜は手に持つた紅で敵を切り裂いて言つた。あるものは頭を刺され、あるものは首を跳ねられ、あるものは心臓を貫かれた。そして敵も大勢で襲い来るが、茜はそれを嘲笑うかのように敵と敵の間をすり抜けていき確実に斬り伏せて言つた。

一方口ボガミの方も一方的になつていた。口ボガミは茜ほど避けるのは得意ではなかつたが、元々機会の体なので黄巾党が使うようなそんじよそこらのなまくらな武器では傷一つつけれず、口ボガミに向かつて言つた敵は殴られ、あるものは首の骨が折れ、あるものは鼻が潰されていった。

そして黄巾党もそんな二人に勝てる筈が無いので逃げる者が続出していたが、茜が使つたサンクチュアリによつて逃げる場所などどこにもなく、それでも逃げようとした奴らも茜の零や口ボガミの仕込み銃などの飛び道具でやられていつた。そして最後の一人を殺した後、

口「ライセテハ…（来世では…）」

茜「良きつながりと人生を…」

と言い残して村へ帰つて言つた。

村へ帰る途中、茜はロボガミに全てを話した。趙雲が女だと言った時何故か目が光つて気がしたが氣のせいだと自分に言い聞かせた。

青年「使い様が帰つてきたぞ————」

男1「使い様————！」

男2「貴方は町の英雄です！」

男3「ありがとうございます！」

町に着くなり、茜は町の人達に歓迎された。何しろ自分達を苦しめていた黄巾党から村救つてもらつたのだから。因みにロボガミは、

口「クソ～…、ナゼアカネバツカリ……ワシモガンバツタノー…
（くそ～…何故茜ばかり……わしも頑張つたのに……）」

茜が歓迎されているのに自分が歓迎されてない事を気にしているら
しく、入り口付近でいじけていた。

茜「ほら口ボガミ、そんなとこでいじけては迷惑にしかなりません
よ」

口「ナンジャ（なんじゃ）？エイコウノヨコウカ（英雄の余裕か）
？ソンナ＝ヒライノカ（そんなにえらいか）？エイコウハ（英雄は）
」

茜の言葉に口ボガミは絡んで来た。

茜「別にやつこいつ訳では、ん？、口ボガミ！」

口「ナンジャ（なんじゃ）？エイコウ（英雄）」

茜「いいから見て下せ～、あちらから何やら旗を掲げた軍勢が向か
つて来ます」

口ボ「ナニ（何）－マタコウキントウカ（また黄巾党か）－？」

茜「いえ、それにしては動きが整っています。とりあえず敵でない
ことを祈りましょ～」

ロボ「テキダツタラドウスルンジャ（敵だつたりどりするんじや）？」

茜「その時はまた守るだけです。誰か来たみたいですよ」

そう言つと向こうから兵士らしき人達が数人向かつて來た。

茜「止まりなさい。貴方達は何者ですか？」

茜は警戒しながら兵士に質問した。

兵「まつてください。我らは敵ではありません。我らは董卓軍。この町の県令に頼まれ、救援に來ました」

全「え？」

兵士の答えに村の人と茜達は啞然とした。

あの後兵士に説明してもらひうど、どうやら此処の太守はただ逃げたわけではなく、町を救うために董卓のところへ向かっていたらしい。これを聞いた町人達は太守の人をせめることなく簡単に許した。

そして現在、茜達の前には三人の少女がいた。

? 「私は董卓、字はこの度は救援に遅れて誠に申し訳ありません」

? 「ちよー月え！？」

月と呼ばれたいかにも人畜無害そうでお人形のような少女が町人達に頭を下げて、眼鏡を掛けたツリ目の中年女性が驚いていた。どうやら彼女が董卓の用である

男1 「董卓様、どうかお顔を上げてください」

男2 「そうですとも。こうして、救援部隊を派遣して頂いたのですから、お礼をいこそれ、せめることなどできません」

大将自ら頭を下げて謝罪する姿を見て心を打たれて、町人達がお礼の言葉を述べる。次々と寄せられる言葉に、董卓も顔を上げて「ありがとうございます」と告げた。

? 「それにしても、よあれだけの数の黄巾党を撃退できたなあ」

眼鏡「確かにあの数の賊をこの人数で倒したんだから対したものね。誰が指揮を執ったの？」

眼鏡を掛けた少女とサラシを巻いた袴姿の関西弁で喋る女性が前に出て、黄巾党を倒した功労者を尋ねる。

すると町人から聞かされたのは、噂に聞いた天の御遣いだった。

天の御使いが颯爽と現れ、変わった剣を手に仲間と共に一人で全ての敵を倒した。

あれは正に天の者の成せる奇跡だと、見ていた誰もが語った。

眼鏡「はあ！天の御遣いですって！？しかもたつた一人で！？」

サラシ「アホな！そないな奴が、ホンマにおつたんか！？」

口「マアジッサイーイルンダカライルンジャロ（まあ実際にいるんだからいるんじやろ）」

サ「わあ！なんやコイツ！？」

突然現れた口ボガミに、サラシを巻いた女性は驚いて武器を構えた。

口「ソウケイカイスルナ（そう警戒するな）。ワシハロボガミ、テンノミツカイノナカマジヤ（わしはロボガミ、天の御使いの仲間じ

や) 「

眼「あんた人間？」

ロ「いや、ニンゲンテハナイナ（いや、人間ではないな）。ジャガイマハソンナコトハドウテモイイジャロ（じゃが今はそんな事はどうでもいいじやろ）」

眼「どうでもよくはないんだけど？まあいいわ。それで、ろぼがみだつたつけ？その天の御使いはどうにこいるの？」

ロボ「アカネジヤツタラソコニイルゾ（茜じやつたら其処にいるぞ）？」

そう言つてロボガミは茜を指差す。

サラシ「アンタが天の御使いか？」

茜「はい、確かに天の御使いと名乗つています」

眼鏡「アンタ本物？」

眼鏡の少女は疑わしそうな目で茜を睨む。

茜「では私の能力の一つをお見せします」

そつ言つと茜は田の前に手を出し、

茜『クリエイト』

手の上に握り拳ぐらいの大きさ金の塊を出した。やはり初めて見る三人は驚いた。

眼鏡「な！アンタそれ何処から出したのよ！」

茜「これは私の力で出した物です。これで信じてもらえたでしょうか？」

眼鏡「ええ、こんなの見せられたら信じないわけにはいかないわ」

茜「わかりました。とりあえずこれは差し上げます」

そつ言つて茜は眼鏡の少女に金を差し出した。

眼鏡「え？いいの？」

眼鏡の少女は目を丸くしながら言った。

茜「はい、記念とこの事で貰つて下せこ」

眼鏡「何の記念か知らないけど…有り難く受け取つておくれわ」

そう言つて眼鏡の少女は金を受け取つた。

董卓「では改めて、私は董卓と申します。天の御遣い様。あなた様のお陰で、たくさんの尊い命が助かりました。まずは、その事をお礼申し上げます」

そう言つて董卓は頭を下げる。

茜「（やうやう）董卓は史実の董卓とは違つみたいですね。
）頭を上げて下さい、私が助けたいと思つて助けただけですので」

董卓「それでも助けてもらつた事には変わりありません」

そう言つて再び頭を下げる董卓を見て茜は迷つた。

茜「（やはりまつたく違いますね。彼女の用な優しい少女が暴政を行つなど有り得ないでしょ）」

眼鏡「ちよつと、何呆けているのよーまさか、月で変な想像してい
るんじゃないわよね！」

茜「?、変な想像?」

眼「……………どうやら違つみたいね……」

茜「?/?/?」

何一つ悪意のなさそうな顔に、眼鏡の少女は完全に毒氣を抜かれてしまつた。

董卓「あの、御使い様はこれからどうするのですか?宜しければ私の下へ来ませんか?」

すると董卓は茜を勧誘した。普通の男ならば一いつ返事で了承するか少しは考へる筈である。だが、そこは茜、

茜「すみませんがお断りします」

何一つ迷いなく断ることが出来るのである。

眼鏡「アンタねえ、せつかくの町の申し出を断るのー?」

これに対して眼鏡の少女が反発してくるが、

茜「すみません、私はやらないでほい事があるので」

再び法む事もなく言つた。

董卓「やらなくてはいけない事ですか?」

茜「はー」

董卓は茜のやらなくてはいけない事が何なのか興味があつたようなので、茜はつながりや自分が旅をしていく理由、既に仲間がいることなどを説明した。

董卓「せつですか、それなら無理に引きとめるわけにもさせませんね」

茜の説明を聞いて、董卓達も納得したよつだ。

茜「すみません。お詫びといつてはなんですが、私とつながりを持ちませんか?」

董卓「つながり、ですか?」

茜「はい、先ほど話した用に私はつながりを守るために旅をしてい

ます。もし貴方に危機が迫った時、つながりを作る者として、そして友として貴方を助けに行きます」

董卓「助けに……来てくれるのですか…？」

茜「はい、我がつながりにかけて」

これを聞いた董卓は、

董卓「わかりました。私は貴方とつながりを持ちます」

茜とつながりを持つ事を決めた。

茜「それでは、改めて名乗りります。私は姓は姫、名は神、字は刀赤、真名は茜です。これからは茜と呼んで下さい」

董卓「真名を預けてくれるのですか？」

茜「はい、つながりを持つ者として貴方に私の真名を預けます」

董卓「わかりました。では私の事は月と呼んで下さい」

茜「わかりました。ではお願ひします月」

月「はい、茜さん」

そして茜は董卓の真名を預かり、

眼鏡「月だけ真名を教えているのも嫌だし、一応僕も教えておくよ。
僕は賈駆、真名は詠よ」

サラシ「ウチは張遼、真名は靈しあや、よろしくうな」

二人からも真名を預かる事になった。

茜「わかりました。では詠と靈も私の事は茜と呼んで下さい」

詠・靈「わかつたわ（でー）」

茜「はい。それでは、今からつながりを持ちます」

そう言って茜は三人に指輪を向けた。

茜「この指輪はつながりの証です。もし危機が迫った時、損得関係なしに、つながりを守るために助けに行く事をこの指輪に誓います」

こうして、茜は新たに三人の少女とつながりを持つたのであった。

口「ワシカンゼンニクウキジャナ（わし完全に空氣じゃな）……」

いたのか、口ボガミ……

再開×出会い×更なる出会い（後書き）

何とかここまで戻れました。

次の話で書き直しは終わりです。

迷惑かけてすいませんでした。

次回、三羽鳥に出会います。

では、さよなら。

川鶴鳥×戦記伐×ホーリ茜（前編）

せりと追つねもつた。

じくつか会話の追加や変更があります。内容は変わません。

では、どうぞ。

三羽鳥×賊討伐×チート茜

月たちと別れてから一週間、行く先々で賊を討伐しながら旅をした結果、茜には「天の御使い」、ロボガミには「鋼の拳士」という二つ名が付いた。茜は元々行く先々で天の御使いと名乗っていたからともかく、ロボガミがこの二つ名を聞いた時、「フタツナダサツ（二つ名ダサツ）！」と文句を言っていた。因みにいまは充電が切れているので茜がおんぶして運んでいる。

そして現在、茜はある町にいたのだが、

茜「人がいませんね」

そう、そこには人っ子一人として歩いていなかつた。

茜「周りから気配を感じるから人はいるはずなんですが「おい！その貴様、止まれ！」？」

茜が振り向くと、そこには両腕に手甲をはめた至る所に傷がある銀髪の少女が茜を鋭く睨んで臨戦態勢をとつていた。

少女1「見ない顔だが、何者だ！？」

茜「はい、私は旅をしている者で、性は「凪ちゃん」。ひみつと待つのーー。」「待つんや凪ー。」「？」

茜が名乗らうとした時、露出の多い服を着た関西弁の少女と独特な喋り方をした少女が走ってきた。

少女2「凪ちゃん、その人違うと思つの？」

少女3「ほれ、何処にも黄色い布付けてへんや」「ひー

少女1「あつ」

少女3「今気づいたんかいー。」

少女1の反応に少女3がツッコミをいた。

少女1「も、申し訳ござこませんー。」

茜「いえ、そちがこもそちらの都合があるはずですので気にしないで下さい」

茜は何一つ気にしていない様子で爽やかスマイルを繰り出しき

三人「「「ツ！・・・／＼」」

三人は顔を赤くした。

少女3「と、ところで、兄さん結局誰なんや？」

少女3は先程の爽やかスマイルが効いていたのか少しどもりながらも茜が何者なのかを聞いた。

茜「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は旅をしている者で、性は姫、名は神、字は刀赤と言います。一応自分では天の御使いと名乗っています」

三人「「「・・・・・」」

茜「?、どうしましたか？」

三人「「「・・・・ええええええ！」！」」

茜が名乗ると、三人の少女は驚いた。

少女3「兄さんが噂の天の御使いやつたんか」

少女2「そういえば噂通りの格好してるのー」

少女1「み、御遣い様！お会いできて光榮です！あの、御遣い様の武勇は私の耳にも届いておりまして、それで、その」

茜「とりあえずまずは落ち着いて下さー」

少女1「はうつーす、すみませんーー」

急に興奮した様子の少女を落ち着かせる。

少女2「凪ちゃんは御遣い様に憧れてるの~」

少女3「せやな、兄さんの活躍を聞くたびに自分の事みたいに喜ん
どったし」

少女1「ふ、一人ともー」

凪と呼ばれた少女が慌てて一人を止める。名前からしてたぶん真名であるつ。

茜「そんなんですか、ありがとー」そこまです。それでは皆さんの名前を聞いても宜しいですか？」

少女1「は、はい申し遅れました！私は樂進、字を文謙と申します

「…」

少女3「ひのは李典、今は曼成や。よろしうつな兄さん」

少女2「沙和は子禁でこの。子は文則なの~」

茜「はい、宜しくお願ひします。とにかく、この町はなぜ誰も外に出でないんですか?」

樂進「はい、今この街は黄巾党の襲撃を受けているのです、一時は退けましたが奴らはすぐにでもまた攻め込んでくるでしょう…。ワタシ達義勇軍はその迎撃の準備をしていましたといふなのです」

李典「そんでもってこの辺りを治めてる役人さんにも援軍を要請してゐるやけど、来るのにまだ時間がかかるみたいなんや」

茜「うですか、宜しければ私もお手伝いしましょつか?」

三人「「「えつー…」「」」

茜「もちろん!迷惑にならぬのなら手を出しませんが…」

樂進「迷惑だなんてとんでもないです、申し訳ありません御使い様。ご助力頂けますか?」

茜「はい、宜しくお願いします。それと、私の真名は茜と申します」

樂進「ま、真名を聞しいんですか!…?」

茜「はい、共にこの町を守る仲間として皆さんに預けたいと思いま

した。これからは茜と呼んで下さい」

楽進「……わかりました。私の真名は凪なぎと申します。茜様が預けてくれたのですから私も真名預けます。私の事は凪と呼んで下さい」

李典「ウチの真名は真桜や、ウチは兄さんって呼ぶからよろしくうな兄さん」

迂禁「沙和の真名は沙和なの～。宜しくなの～茜さん」

茜「沙和に真桜に凪ですね、わかりました。これから宜しくお願ひします」

三人「「「はい（おひつ）（なの～）ー。」「」

そして茜は三人の少女と共に町の防衛をすることになった。

真桜「そういえば兄さんはなんでまた旅なんかしるんや?..」

凪「私も気になります」

沙和「沙和も気になるの～」

真桜が突然茜が何故旅をしているのかを聞いてきた。ビックやア風と沙和も興味があるようだ。

茜「旅の理由ですか？…そうですね、簡単に言つとつながりを守る事です」

風「つながり？…どういう事ですか？」

茜「そうですね、じゃあこの戦いが終わつた後に詳しく説明します」

沙和「えへ、沙和は今すぐ聞きたいの～」

茜「でしたら早〜」の戦いを終わらせる事です。その後ちゃんと説明しますので」

沙和「むへ、わかつたの～。終わつたら絶対教えてなのー」

茜「ふふ、わかりました。約束します」

そう言いながら、茜は小さく微笑み、

三人「「「・・・／＼」」」

それを見た三人は再び顔を赤くした。

真桜「そ、そういうわけだから兄さんの畠中にあるそれはなんや？」

茜「背中？ああ、口ボガミの事を忘れていました」

三人「「「ろぼがみ？」」」

茜「「アレの」」とです。そういうえばそろそろ動かせそうですね」

そう言つと茜は口ボガミを下ろして起動させ、

ロボガミ「ウガ――――――――――――――――」

突然ロボガミが動きだした事に二人は驚いた。

この後三人にロボガミの事を説明する事と何故か真桜が「分解して調べたい！」といつてきたりを抑えるのにとても時間がかかった。どうやら真桜は絡繰りにとても興味があるらしくこの後もロボガミの構造に興味津々でロボガミの事ジツと見ており、ロボガミは自分の天敵にでも出逢ったかの用に真桜の事を凄く警戒していた。因みに茜の仲間という事で、ロボガミも三人から真名を受け取った。

そして現在、

茜「とりあえず状況を整理しますか」

茜達は作戦会議の用な物を行つていた。

茜「まず、敵の人数は約2000人、多く見積もつて2200人、そして義勇軍は800人、その内700が歩兵で残り100が弓兵。城門は南門、東門、西門の三種類で敵が最も多く来ると考えられるのが南門、此処まではいいですね？」

凪「はい」

茜「それなら南門は私が何とかします。将と兵の割り振りは既に決めてあります」

真桜「おお、なんや兄さん頼もしいでー！」

沙和「頼りになるの〜」「

凪「流石です、茜様…」

此処までを聞いて三人は茜を慕っていた。

ロボガミ「ソレデ、ドウイ・ウワリフリナンジヤ（それで、どうこう
割り振りなんじや）？」

茜「はい、まず将ですが、西門が沙和とロボガミ、東門を真桜と凪、
南門が私です。次に兵士ですが、弓兵は全て東門に、歩兵を東門と
西門で半分の350ずつ山分けです」

三人「えつ……？」

この時三人は茜の事を、何いつでんだコイツ、と言いたいよつた
で見ていた。

沙和「茜さんの兵士は？」

茜「〇ですよ？」

真桜「じゃあなんや、兄さんは一人で南門を守る氣なんか」

茜「そつまつ事になりますね」

凪「そんなの危険です！幾ら茜様でもたった一人で黄巾党を相手にするなんて「デキルゾ（できるぞ）」ロボガミ殿！？」

ロボガミ「アカネノシヨサハコノナカデワシガイチバンシッテイル。（茜の強さはこの中でわしが一番しっている。）アカネナラコウキントウナンカヒトリデモイチマンヤニマンハヨユウデタオセル（茜なら黄巾党なんか一人でも一万や一万は余裕で倒せる）」

凪「そ、それ程の実力なのですか！？」（。。：）

真桜「さすがは天の使いやな……」

沙和「すごいの～」

ロボガミの話を聞いた三人は茜の強さに心底驚いていた。

ロボガミ「ソレモフツウニタタカツタバアイジヤ（それも普通に戦つた場合じや）。ホンキヲダセバジュウマンヤニジュウマンハイケルジヤロウナ（本気を出せば十万や一十万いけるじゃうつな）」

だがロボガミはもつとありえない事をサラッと言い放った。

真桜「どんだけ規格外やねん……？」

沙和「凄いを通り越して怖いぐらいなの～？」

これを聞いた三人の内、真桜と沙和は若干ひいていた。

茜「過大評価しないで下さいロボガミ、十万はともかく一十万は私も少ししきついですよ」

真桜「できないわけではないんやな……？」

沙和「それに十万でも十分すごいの～？」

そして茜が完全には否定しない分、真実味が増してさらこひいた。

茜「まあ、ロボガミの話はともかくとして。私なら死ぬことは無いので任せて下さい」

真桜「まあ、これだけ言つてんやから断る訳にはいかへんな」

沙和「沙和は茜さんの事信じてみるの～」

凪「……わかりました。絶対に死なないで下さいね」

茜「はい、三人みたいな可愛い少女を置いて死ぬつもりなどありませんので」

茜は再び歯の浮く用な台詞をサラッと言い放ち、

三人「・・・／＼／＼／＼」

三人は顔を再び赤くした。

茜「？顔が赤いですがどうしましたか？」

三人「・・・な、なんでもありません！（ないでーー）（ないのーー）／＼／＼／＼」

茜「？」

鈍い時はとことん鈍い、茜であった……

現在、茜は南門の城壁の上にいる。

茜「結構いますね」

其処から少し離れた場所から向かつて来ている黄巾党を見ながら言った。

茜「さて、死ないと約束しましたから出来れば安全策を取りたいですね」

そもそも、本気を出せば十万を一人で相手に出来る茜が五千にも満たない賊を相手に危険などあるのだろうか……

茜「やはりお氣に入りですね『万華鏡』『スイープ』」

すると茜は分身を作り、それを吸収した後、

茜「まずは試し打ちです。『姫神砲』」

敵に向かつて姫神砲を放つた。

ドーン

茜「結構減りますね。これなら安全かつ効率的に減らせますね」

何処までも規格外な茜であった。

茜「殲滅完了。来世では、良きつながりと人生を……」

その後、茜は姫神砲を打ち続け、黄巾党は一刻もしない内に全滅した。

茜「それでは他の所を手伝いに行きますか。西門は口ボガミがいるので大丈夫でしょうから東門ですね」

そつ言つて茜は、東門の方へ向かつて行つた。

東門

茜「やで、 凪や真桜はど」」「ドーホオオオオン」何ドしょ「つか？」

茜が東門につくと、突然轟き音が聞こえてきたので、 茜が轟き音の
した方へ行つてみると、

凪「はああああ

ドーホオオオオオ

茜「あれば凪に真桜ですね。 それにしても凪は氣を使えるんですか」

そつ茜が云つ通り、 凪が敵に向かつて氣弾を放つていた。 そしてそ
の近くに真桜の姿もあつた。

茜「どうあえず行つてみますか」

一方、凪たちは、

真桜「凪、南門から聞こえたとつた轟き音、聞こえへんくなつた」

真桜が言つているのは、茜が姫神砲を放つて起つて物である。どいつやら東門まで聞こえていたらし。

凪「そりゃ聞こえないな。もしかして… 茜様の身に何か…」

真桜「考え過ぎやつて凪、余り悪い方に考えん方がええで」

凪「確かにそうだが… 真桜は心配じやないのか?」

真桜「アホ、心配に決まつとるや。せやけど兄さんはウチりと約束したやないか、兄さんが約束破るわけないや」

凪「真桜… そうだな。茜様なら大丈夫だよな」

真桜「せやで、兄さんがそう簡単に負ける筈ないや」

茜「私がどうかしましたか?」

真桜「せやから兄さんか、て兄さん!？」

茜「はい、何でじょうか?」

真桜「いやいや、何フツーに話しどんねん! 一体いつからいたんや」

茜「そうですね、多分「兄さんが約束を破るわけないや」辺りだと思います」

真桜「そんなどこからおひたんかいな。せめて声かけてほしかったわ」

茜「いえ、話しかけていましたよ。ただ一人とも話しに夢中で気付いてませんでしたので」

真桜「そんなんかいな。でもまあ兄さんが無事でよかつたは、なあ

凪

凪「……」

茜「凪？」

凪「……」

先程まで心配していた茜が無事である事と、南門にいる筈の茜が東門に、それも自分の目の前にいる事の衝撃で、凪は固まっていた。

茜「凪～」ふに

呼んでも反応がないので、茜は凪のほっぺを軽く突いてみた。

凪「……はー、私は一体……」

「どうやら帰ってきたようだ。

茜「大丈夫ですか？ 凪」

凪「あ、はい、ってやうじやありませんー！何故いらっしゃるに、南門を守っていたのではー？」

茜「南門の敵は全て殲滅したので、うちの手伝いに来ました」

真桜「はー！？ 殲滅って・・・」の短時間で？

茜「そういう事になりますね」

凪「この短時間で全て殲滅するとは...、さすが茜様です！」

真桜「絡繰りの兄さんが言つた通りやな」

茜が言つてゐる絡繰りの兄さんはロボガミの事である。

茜「はい、といつ訳でお手伝いします」

凪「わかりましたー！」助力感謝しますー！」

茜「はい、それでは行きましょ！」

一人「はい！（おうー）」

それから、黄巾党は対して時間をかけず殲滅された。その際に使つた姫神砲についても聞かれたが、「後で説明します」と言つて再び戦闘を開始した。

因みに西門はロボガミが奮闘した事で東門とほぼ同時に殲滅された。

真桜「それで、兄さん。さつき兄さんが使つとつた光はなんやつたんや？」

沙和「光？」

凧「沙和も南門や東門から轟き音が聞こえていただろ。あれは茜様が口から光を放つて敵を吹き飛ばしていたんだ」

沙和「何なの？？それ」

茜「それについては先程の約束といつしょに話します」

沙和「そう言えば忘れてたの？」

茜「いえ、せめて覚えてて下さい」

真桜「それで、兄さん。結局あれはなんやつたんや?」

茜「はい、あれは……」

そして茜はつながりの事や自分がこの世界に来た理由、旅をしている理由、について詳しく述べた。

結果

茜「とりあえず私の話はこれで終わりですね」

凪「立派です!」

真桜「せやな」

沙和「なの〜」

三人はそれぞれ尊敬の眼差しで茜を見ていた。

茜「何ですか?」

凪「要するに貴方は、人と人との絆を守るために世界を旅して仲

間を探していくに忙い事ですね?」

茜「やうやくいとになりますね。でもこれは私の血口満足でしかありません」

凪「それでも、他人のために戦える事はとても立派です!？」

茜「やうなんですか。でしたらやうなのがしようね」

凪「はー。それで、茜様に頼みがあります」

そう言つと、凪はいきなり跪いて、

凪「私を茜様の仲間にしてくれださーーー。」

いきなり仲間にしてくれと言つてきた。

茜「良いのですか?私は志はありますが今はただの根無し草ですよ?」

凪「そんな事関係ありません!私は貴方と共に人のために戦いんですーーー。」

茜「凪……わかりました。お一人はどうしますか?」

真桜「皿が付いていくつて言つなら、ウチも付いていくに決まつと
るやろ」

沙和「沙和も」

茜「わかりました。では三人共、私と仲間としてつながりを持つて
下さい」

三人「はい！（おうー）（なのー）」

こうして、三羽鳥の三人は茜とつながりを持ったのだった。

ロ「ワシ、マタワスレラレテル（わし、また忘れられてる）」（ト
ト）

何かと空気になりやすい、ロボガ!!であった……

三羽鳥×賊討伐×チート茜（後書き）

とつあえずこんな感じです。

色々迷惑かけました。

以後、こんな事が無いよう気をつけます。

次回、霸王に会います。

因みに三羽鳥とロボガは密将にする事に決めました。

霸王 × 賭け × 狹われた茜（前書き）

今回はいつもより短めです。

それと、会話に不自然な所があるかも知れません。

違和感を感じたらすいません。

では、どうぞ。

霸王×賭け×狙われた茜

あの後凪達と話した結果、星達の用にじびこかで密将をして後に合流する事が決まった。その際、援軍に向かっている曹操軍に決めた。

しばらくしたら旗を掲げた軍が向かっていると聞いてもしゃと思つて通した。そして今茜達の前には三人の少女がいる。

? 「あなた達が救援を頼んだのね」

三人の少女の内、金髪でクルクルな髪をした小柄な少女が聞いてきた。

凪「はい。救援に来て頂き感謝します」

真桜「ほんまにおおきに」

沙和「ありがとうございますなの〜」

金髪「やつ、あなた達名はなんといつの?」

凪「私は楽進と申します」

真桜「ウチは李典や」

沙和「沙和は子禁なの～」

茜「私は姫神と言います。旅の途中でこの町に立ち寄り、賊討伐をお手伝いさせてもらいました」

ロボ「ワシハロボガミ（わしはロボガミ）、キシンノナカマジヤ（姫神の仲間じや）」

茜とロボガミが名乗ると金髪の少女がまるで新しい玩具でも見つけた用な顔をした。

金髪「へえ、あなた達が噂の天の御遣いと鋼の拳士ねえ」

青髪「噂で聞いている容姿も一致しますね」

茜「確かに天の御使いと名乗っています。それと、よろしければあなた達の名前を教えてもらえますか？」

茜が三人の少女に聞いた。

金髪「そつね、私は曹操、字は猛徳よ」

金髪の少女、曹操が名乗る。

茜「（彼女が二国の一つ、魏の霸王、曹猛徳ですか）」

? 「私は夏侯惇、字は元嬢だ」

黒髪の女性、夏侯惇が名乗る。

茜「（夏侯惇、どうやら猪突猛進の用ですね）」

青髪「私は夏侯淵、字は妙才だ」

青髪の女性、夏侯淵が名乗る。

茜「（夏侯淵、表面はクールに見えますが、姉の事をよく想つているみたいですね）」

曹操「それより姫神。あなたに聞きたい事があるの」

茜「聞きたい事? なんでしょうか

曹操「今回の戦、敵の兵数は義勇軍の一倍以上だった筈、一體どうやって勝ったの?」

茜「それなら私が敵の大半を受け持つたからです」

曹操「どうこう事?」

茜「今回の戦には三つの城門の内、南門が最も敵が来ると言われられ

ました。ですが、義勇軍はただでさえ人数が少ないので南門に集中したら他の二つが直ぐに破られてしまいます。ですので、私以外の人はその二つを集中的に守つてもらい、南門は私が担当しました」

曹操「それじゃあ貴方は一番敵が来る門を一人で守つたの？」

茜「正確には南門の敵1000人ぐらいを殲滅後に東門をお手伝いして200人ぐらいを倒しました」

曹操「へえ」

それを聞くと曹操は茜の事をジッと見始めた。

茜「？なんでしうか」

曹操「单刀直入に言うわ。貴方、私に仕えなさい」

すると曹操は突然茜を勧誘した。

茜「どういふ事でしうか？」

曹操「貴方のその武を私の為に振るいなさい」

「どうやら曹操は茜の強さが気に入つたらしい。だが茜は董卓の誘い

も断つたのだ。

茜「そいつの事でしたらお断りします」

当然、曹操の誘いもあつたり断つた。

曹操「そう、理由を聞いても「貴様あー華琳様の誘いを断るとは、何事だ!!--」

曹操が理由を聞こうとした時、隣にいた夏侯惇が大剣を抜いて茜に斬り掛かつた。だが茜は口ボガミの飛び蹴りの時のように最低限の動きでそれを避ける。

夏侯惇「貴様!-避けるな!-

そいつ言って再び茜に斬りかかるつとした時、

曹操「止めなさい、春蘭」

曹操がそれを制止した。

夏侯惇「で、ですが華琳様」

曹操「やめなせこと言つておるの」

夏惇「は、はい・・・」

曹操の一言で夏侯惇剣は収めた。どうやら彼女には頭が上がらないよつだ。

夏淵「それにしても・・・姉者の一撃をいとも簡単で避けるとは」

曹操「そうね。それで、理由を聞いてもいいかしら?」

茜「はい、私には既に七人の仲間がいます。仲間の為に私は国を得なくてはいけないんです」

曹操「そつ…それで、その仲間はどうしたの?」

茜の話を聞いて曹操は疑問をぶつけた。

茜「七人の内、三人は黄巾党から色んな人達を守つてもうつ為に今は密将として働いています。他の四人はこちらにいる三人とロボガミです」

そう言って三羽鳥とロボガミの方を向く。

曹操「貴女達がそつなの？」

凪「はい、私達は茜様が旅をしている理由を聞いて自分から仲間になる事を決めました」

口ボ「ワシハモトモトアカネノナカマジヤ（わしは元々茜の仲間じや）」

曹操「そつ……それで何故あなたは旅をしてるの？」

茜「はい」

その後茜は自分が旅をしている理由を話した。

曹操「そつ、分かったわ。とりあえず、今回は引いてあげるわ」

どつやら曹操も納得したようだ。だが…

茜「今回は、ですか。でしたら私と賭けをしませんか？」

曹操「賭け？」

茜「ええ、私が国を持つたら必ず貴女とぶつかる時が来ます。その時に私を打ち負かす事が出来たら貴女の部下として身も心も捧げま

茜がとんでもない提案をした。

曹操「へえ、面白いひじきじゃない。その賭け受け立つわ」

そして曹操はそれを了承した。

茜「おや、やる気満々ですね」

曹操「私は曹操徳。欲しい物は必ず手に入れる・・・楽しみに待つていなれー」

茜「ふふ、わかりました。楽しみにしてます」

ビーフサンド茜もやる気満々の用である。

茜「あつそれと、貴女に頼みがあります」

曹操「頼み?」

茜「はこ、ほりこむ二人をしづらべの間客としてほしこんです。もうひとつタダでとまこません」

曹操「あら、何かくれるのかしら？」

茜「いえ、あげる訳ではありません。黄巾党が討伐されるまでの間口ボガミをお貸します」

曹操「そう、それでソイツは強いのかしら」

曹操が口ボガミを見ながら言つ。

茜「少なくとも一騎当十は出来ます。使用法につけては」ちりを

そつ言つて茜は懐から一枚の紙を出して曹操に渡した。

曹操「なる程、わかつたわ。その四人を密将にするのを認めるわ」

曹操は四人を見ながらそつ言つた。

夏惇「か、華琳様！私は反対です！！」

曹操「あら春蘭、私の決定に不満があるの？」

夏侯惇「そ、そつではありません、そちらの二人はともかくこんな鉄の塊が役に立つ筈ありません！！」

ロボ「オイオイ、イクラナンデモテツノカタマリハナイジャロ（い
くら句でも鉄の塊はないじゃろ）せめてロボガミと呼べ」

ロボガミは自分が鉄の塊扱いされたのに不満があるらしい。

夏侯惇「つるやこーー貴様など鉄の塊で十分だー！」

ロボ「ソウカ（やうか）、ナラワシトショウウブシロ（ならわしと勝
負しろ）。オマエガカツタラスキニヨベ（ならわしと勝負してお前
が勝つたらすきに呼べ）、タダシワシガカツタラヨビカタヲアラタ
メテモラウゾ（ただしわしが勝つたら呼び方を改めても“りつぞ”）」

夏侯惇「望むとこりだーー貴様などバラバラにして海の藻屑にして
やるわーー！」

ロボ「フフン（ふふん）、ウデガナルワ（腕が鳴るわ）」

そして勝手に勝負する事を決めた。どうやら一人とも気合こ十分ら
しい。

茜「曹操さん、いいんですか？」

曹操「いいのよ、どうせ勝負しなければ認めないわ。それにアレの
強さを確かめるのにちょうどいいわ」

茜「それもやつですね」

「やつやら茜も納得したらし。」

茜「あれと曹操さん。私の事は茜と呼んで下せ、私の真名です」

曹操「いいのかしら？」

茜「はい、これから私が忠誠を誓うかもしない方ですから」

曹操「そう、なら私の事は華琳と呼びなさい」

茜「わかりました。これからよひしへお願いします。華琳」

華琳「ええ、いやりいやむね茜」

「やつやで、茜は霸王と自分を賭けた勝負の約束を果たしたのである。

余談だが、茜が華琳の真名を呼んで夏侯惇が茜を再び斬りついた
が再び華琳が抑えた。因みにその後華琳に真名を許す用言われ、夏
侯惇はしぶしぶながら茜と真名を交換した。夏侯淵は茜を認めてい
たらしく、あっさりと真名を交換した。

夏侯惇の真名は春蘭、夏侯淵の真名は秋蘭である。

霸王 × 賭け × 狹われた茜（後書き）

以上です。

やはり違和感も感じますよね。すいません。孫策の時も違和感を感じると思います。先に謝つておきます。すいません。

次回、小霸王に出会います。

言つたそばからすいません。

県×お礼×孫策の企み

現在、茜は「」の国の城にいる。何故こんなところにいるかと聞いたら
……

回送

曹操達と別れた後茜は再び旅に出たのだが……

茜「」も、何処でしょ「」つか?」

茜は迷つてしまつた。

実は茜は三国の内魏と蜀の武将を仲間にして「」からも一人ぐらい誰か欲しいと思っていたので県を田舎していた。

だがこれまで出会つた円（董卓）や華琳（曹操）は茜があてもなく旅をして出合つた。逆に言えば今おうと考へてたらその分道がそれで会えなかつたのである。「」もで言ふばわかるであらひ。

つまり茜はあてもなく旅をすれば良いことに行けるが逆に田舎している場合は中々たどり着けないのである。現に茜なら県に行くには二日もあれば十分なのだが既に一週間が過ぎてこる。

茜「取りあえず今は県よつもビ「」か町に行きたいですね」

その想いが通じたのか茜はそれから歩き続けてから一刻後、町を見つけた。

茜「よかつたです。取りあえずもう迷つのは嫌ですのでこの町で食事をした後、地図でも買つとしますか」

などといつ事を考えながら茜は町に入つていった。だからであつて、茜がこの町に入る途中、図と書いてある立て札に氣づかなかつたのは……

茜「結構賑わつてますね」

現在、茜は町を見て回つてゐる。因みに既に食事も済ませ、今は地図が売つている所を探してゐる。

茜「ん? あれはなんでしょうか?」

町を歩いていると、茜は妙な人垣を見つけた。

茜「そこのお姉さん」

? 「ん…儂か？」

茜「はい、私は旅をしている者なんですが、この人垣はなんですか？」

? 「実は今賊が街の民を人質にとつておつてな…」

茜「賊？」

そう言つて茜が人垣を見ると、その間からモノクルのような眼鏡をかけた少女が賊の用な男に入質にされている。そして賊の前には褐色な肌の女性が賊を睨んでいた。

茜「よろしければ私がなんとかしますよ」

? 「出来るのか？」

茜「ええ……『キャトルカム』」

そう言つと茜の体が突然ブレだし茜の姿が消えていった。

? 「なー。」

茜「（安心げ）ださい、姿を消しているだけです。では行って来ます」

そう言つて賊の方へ向かつて行つた。

【キヤトルカム】

つながりの力を自分の体に纏う事によつて自分の姿を消す能力。

あの後、茜は賊に「ツソリ近づいて武器を蹴り飛ばした後に姿を現した。突然姿を現した茜に賊や褐色の女性だけでなく、人質や野次馬の人達まで驚いていたが茜はそんな事関係ないとばかりに賊の腹に掌丁を喰らわして気絶させた後に女性の方へ戻つた。

茜「取りあえず、解決して来ました」

? 「…お、お主何者じや？」

茜「旅の者です…お姉さんは？」

? 「おお、まだ名乗つておらんかったか…儂は黄蓋、字は公覆じや」

その女性、黄蓋が名乗った。

茜「（黄蓋といえども宿将でした筈ですが）

褐色「…祭、一体あれは何？」

するといわつた賊と睨み合っていた褐色の女性が黄蓋の所に来た

黄蓋「儂もよう分からん…そここの旅の者がな」

褐色「ふーん…貴方、名前は？」

茜「私は姓は姫、名は神、字は刀赤といいます」

取りあえず茜は褐色の女性に名乗った。

褐色「姫神つて、もしかして貴方、天の御使い？」

茜「はい、確かにそう名乗つてます。とにかく、貴女の名前はなんでしょうか？」

褐色「私は孫策、字は伯符よ」

褐色肌の女性、孫策が名乗る。

茜「（彼女が江東の小霸王、孫伯符ですか。という事はやはつー）」
は異ですか）」

孫策「…まあ立ち話も何だし、うちに来ない？歓迎するわよ」

茜「でしたら、お詫葉に甘えさせてもらいます」

そいつて茜は孫策達と城へ向かつた。

回想終了

そして茜達は城に入つたのだが…

? 「雪蓮！仕事サボつてどこ行つていたの！」

城に入った瞬間、孫策が眼鏡をかけた女性に怒られた。

孫策「『』めんなさい冥琳、ちょっととした息抜きよ、息抜き」

眼鏡「次サボつたら仕事増やすから」

孫策「ちょ、それだけは』勘弁を……」

あきらかに主従関係が変わっている用な光景である。

眼鏡「で、そちらの方は？」

どつやら茜に気づいたらしく。

茜「初めまして、私は姫神刀赤といいます…あなたは？」

眼鏡「私は周瑜、字は公謹…あなたが天の御遣い？」

茜「確かにそう名乗ります」

周瑜は茜を疑わしそうな目で見た。どつやら疑つていろいろし。

孫策「冥琳、彼は我が吳の民を救つてくれた恩人よ」

周瑜「そうでしたか、我が吳の民を救つてくれて感謝する」

黃蓋「儂からも礼をいつ

茜「いえ、気にしないでください。困っている人がいたら助ける性分でして」

周瑜「それでも何かお礼をしなければ…」

どうやら何かお礼をしなければ気が済まないらしい。

茜「でしたら、一いつ頼みがあつます」

孫策「何かしら?」

茜「まず一つ用ですが、実は私は仲間探しの為に旅をしてるんですが、この国人達を見さしてもらえますか?」

周瑜「つまり、いつの将を勧誘するつもりか?」

周瑜は茜を睨みながら聞いた。

茜「いえ、流石に將は無理だと思いますので民や兵士の中に良かれやうな人がいたらお願ひしてもよろしいでしょうか?」

周瑜「そうか、どう思つ? 雪蓮」

孫策「別にいいわよ。ただし、相手がいにって言つたらね」

茜「はい、それとその事について聞きたい事があります」

孫策「何かしら?」

茜「陸遜、周泰、甘寧、凌統、太子慈、呂蒙、この中にどの将はいますか?」

茜は図の有名な将を次々と出した。

孫策「陸遜と周泰はいるけど、他は知らないわね」

茜「そうですか、わかりました。では一つ目ですが、もし良い人材を見つけたらしばらくの間この国で密将にしてほしいんです」

周瑜「それはどうしてだ?」

周瑜もこの理由はわからなかつたらしく。

茜「私は志はあるんですが今はただの根無し草です。ですから国を手に入れるまでは別の諸侯で黄巾党から色んな人を守つてもうう為です。そして国を手に入れ兵士や兵糧の準備を整えたら全ての仲間を召集します」

孫策「あなた他にも仲間がいるの?」

茜「はい、一人は私とこの世界に落ちた者で後は私の志に共感して

くれた人が六人います。」この国で更に増やすつもりです

孫策「へえ、わかつたわ。客将にしてあげる」

「どうやら」承してくれたらしい。

茜「ありがとうございます。私の願いは以上です」

孫策「ええ、それと今度は」うちが聞きたい事があるんだけど」

茜「なんでしょうか?」

孫策「貴方が賊を倒す時、突然出て来たでしょ?あれは何なの?」

周瑜「突然出て来た?」

周瑜はその場にいなかつたから孫策の言つている言葉の意味がわからなかつた。

黄蓋「お主は見てなかつたから知らんじやろうが、姫神は何とかできるといつと突然姿を消して賊の前で出て来てその賊を倒したんじや」

茜「ああ、キャトルカムの事ですね」

孫策「きやとなるかむ?」

やはり横文字は通じないらしい。

茜「あれば自分の姿を誰にも視認出来なくする能力です」

黄蓋「なんと、そのような力を持つていろとは……」

周瑜「実際に見せてくれないか?」

どうやら周瑜は気になるらしい。

茜「わかりました。『キヤトルカム』」

そつまうと茜は自分の姿を消した。

孫策・周瑜「……」

当然、周瑜や消える瞬間を見てない孫策は茜の姿が消えた事に驚いた。そしてすぐに茜は自分の姿をあらわした。

茜「ほんなん感じです」

周瑜「それは妖術ではないのか?」

茜「いえ、コレは私の能力の一つです」

周瑜「一つひとつ事は、他にもあるのか?」

茜「確かにあります。一つ一つ見せてたりきりがありますよ?」

孫策「そうね、所で姫神、貴方うけびこない?」

すると突然孫策が茜を勧誘した。

茜「今回で二回目ですね、すみませんがお断りします」

孫策「そう、それよりさつまに二回目ついでにたけど他にも誘われたの?」

茜「はい、此処に来るまでに董卓さんと曹操さんに誘われました」

周瑜「どちらも有名な諸侯だな、お前はそれも断ったのか?」

茜「はい、ただし曹操さんは賭けをしました」

孫策「賭け?」

茜「はい、私と曹操さんがぶつかる時、もし私を打ち負かしたら身も心もすべて捧げるといつ物です」

孫策「へえ、面白そうね」

どうやら孫策はこの賭けに興味があるらしい。

茜「でしたら貴女もこの賭けに参加しますか?」

そして茜は自ら虎穴にその身を投げた。

孫策「私も?」

茜「はい、私が曹操さんとぶつかる時、其処に貴女もいるはずです。もし私を打ち負かしたら吳の為に身も心も捧げましょ」

孫策「面白そうね、わかつたわ。その賭け私も参加させてもらひわ」

そして身を投げた虎穴から虎が出て來た。

茜「わかりました、でしたら私の事は茜と呼んでください。これから私が忠誠を誓うかもしれないのですから」

孫策「それじゃあ私の事は雪蓮で良いわ」

茜「わかつました。これからよろしくお願ひします雪蓮」

雪蓮「よろしくね茜」

そして二人は真名を許し合つた。

黄蓋「策殿が許すなら儂もだな…儂は祭じや」

周瑜「はあ…私は眞琳よ」

黄蓋は笑いながら、周瑜は呆れながら真名を許してくれた。

茜「はい、よろしくお願ひします。では私はこれで」

やつ言つて茜は城を後にしようとしました。

雪蓮「何処に行くの?」

茜「探すにしても今日はもう遅いですでの宿をとひつと思つてゐるんです」

雪蓮「だつたらひつに泊まつてこつたらびつへ。」

茜「いいんですか？」

雪蓮「別にここのわよねそれぐらー」

茜「そりですか、でしたらお皿葉にせんべいをもらってますか」

雪蓮「ええ、祭、部屋に案内してあげて」

祭「分かり申した、では儂について参れ」

茜「はい、お願ひします」

やつぱり茜は祭に向つた。

茜が部屋を出た後

冥琳「雪蓮何を考えてるの？」

雪蓮「あ、やつぱりバレていた？」

冥琳「何年あなたと一緒にいたと思つたの」

雪蓮「そうね、茜の血を口に入れるよりと申つての。やうすれば口に天の御使いの血が入つたって事、喧伝できるでしょ？」

冥琳「……なる程、そいつ事ですか」

冥琳は呆れながら言つた。

雪蓮「それに、茜にはこの国に残つて欲しいのよ、だつて一目見て只者じやないと思つたもの」

冥琳「確かにそうだが茜がそれを了承するかどうか……」

雪蓮「その為に茜との賭けに勝つのよ。冥琳、作戦とかは任せたわよ」

冥琳「はあ、わかつたわよ」

冥琳は呆れながら了承した。

雪蓮「ありがと。ふふ、待つてなさい茜、必ず貴方を手に入れて見せるから」

霸王だけにありず、江東の小霸王にまで狙われた茜であった。

茜「ん？今何か妙な予感が……」

鋭い時は鋭い茜であった。

異×お礼×孫策の企み（後書き）

取りあえずこじんなかんじです。

冥琳のしゃべり方がよくわからないです。

わかる人は教えて下さい。

次回、仲間が増えます。

余裕があつたらある意味恋姫で一番知られてるアイツを出すつもりです。

できなかつたらすいません。
出でてもすいません。

理由は出てきたらわかります。

漢女（おひめ）×外史×黄巾党

茜は現在、旅に出でいる。

呉の国に泊まつて翌日、茜は地図が売つている場所を冥琳に聞いて町の露天商に行つた。

結果、ちゃんと露天商には地図が売つてあり茜はその地図を買って呉の城に帰つていいく途中、昨日茜が助けた少女を見つけて何気なく声をかけたのだ。

だが、その少女と自己紹介した時、その少女は田豪と名乗つたのだ。

当然茜は田豪に仲間になつてくれる用交渉したのだが、田豪は元々天の御使いに憧れていたらしく、茜に勧誘された時とても慌てていたが、何とか落ち着かせ、仲間になる事も了承してもらつた。因みに田豪の真名は亞莎あーしゃである。

そして亞莎を呉に預けて茜は旅に出たのだ。

以上、状況説明終わり。

そして茜が旅に出てから既に一週間が過ぎて茜は地図にある町を田指している。

茜「もうすぐだと思いますが…あ、見えました」

茜は方向音痴ではあるが頭が悪い訳ではない、つまり地図さえあれば絶対に迷わないのだ。

茜「取りあえず行くと…ん？」

そして町に向かおうとした時、茜はあるものを取った。

茜「流れ星？」

そう、茜は流れ星を見つけたのだ。そして流れ星は次第に落ちてきて、

ド――――ン

町から少し離れた場所に落ちた。

茜「気になりますね、行ってみますか」

そして茜は流れ星が落ちた所に向かつて行った。

流れ星が落ちた場所

? 「此処が新しい外史かしり?」

流れ星の落ちた所にはあきらかにこの世の者とは思えないよつなキモさのおさげにひもパン一丁の筋肉達磨がいた。

筋肉「あら? 何かしり?

筋肉達磨はある視線に気付いてその視線の感じる方を見ると、

? 「.....」

茜が最初に出会ったような髭とチビヒトヅの黄巾党が畠然としながら筋肉達磨を見ていた。

筋肉「いやん、この外史でもアタシはモテモテなのね。すぐ熱い視線を感じるは、アタシにはご主人様がいるのに」

髭「……はーおい、ずらかるぞーー！」

しばらくして髭の男が正氣をとり戻して、他の一人に言った。

チビ「くそー流星が落ちたのを見て来てみたらどんでもないものを見ちまつた！」

デブ「バケモノなんだなー」

どうやら三人共考へてゐる事は一緒に呑み合いでその場を後にしようとしました。

だが次の瞬間、

筋肉「ぬわあんですてえええええーー？」

筋肉達磨が突然三人の前に現れた。

チビ「わあーびっくりした！」

髭「ていうかお前さつき向こうにいただろーーー？」

筋肉「そんな事はどうだつていいのよー」んなあられもない美人を
とつ捕まえて、モリモリ劣情をたぎらせんならともかく、絵にも描
けないバケモノですつてえええー！？」

そつとうと筋肉達磨は三人の方に突っ込んでいき、

筋肉「ふいつううー！」

ドカッ

髪「わやつー！」

筋肉「ふいつー！」

バキッ

チビ「わやー！」

筋肉「ぬつふうううんー！」

ドカッ

テフ「おー！」

三人を簡単にやつつけた。

筋肉「愛は勝つー！」

そして親指を立てながらやついた。

茜「こ」の辺りでしたでしょうか?」

そこへ茜がやつて來た。

筋肉「あらん、いい男?」

茜「ん?だ、誰ですか貴方」

さすがに茜も「」は怖いらしい。

筋肉「アタシの名前は貂蝉あようせん、可憐な乙女にして、絶世の美・女」

これを聞いた茜は、

茜「（貂蝉…有名な武将が全員女性でしたので男だとは思いましたが、絶世の美女がこのよつた姿になつてゐるとは……）」

頭の中で驚いていた。

茜「ん？あれば黄巾党でしょうか？」

すると茜は先程貂蝉がやつつけた黄巾党に気付いた。

茜「死んではいない用ですね、取りあえずこの人達に何があつたか聞きますか。『オールヒール』」

そう言うと茜はオールヒールを使って三人を治した。

三人「は！」

そしたら三人はすぐに起き上がったのだが、

貂蝉「？」

鬚「げ、おい！早く逃げるぞ！」

貂蝉を見た瞬間、三人は一目散に逃げて行つた。

茜「あ、お待ちください。聞きたい事が…行つてしましましたか」

その後茜は貂蝉の方を見たが……

貂蝉「うふっ（舌だしウインク）？」

茜「（この人とは出来れば関わりたくないですね？）では、私はこれで……」

そう言つて茜はその場を後にしてしまつとしたら、

貂蝉「ちよつと待つてちょうだい」

バケモノが茜を呼び止めた。

茜「（見逃してくださーい）な、何でしようか？……？」

茜は心の中で本音を叫びながら引きついた顔で聞いた。

貂蝉「聞きたい事があるんだけど、
ご主人様、天の御使いを知らないかしら？」

だが天の御使いと言う単語を聞いた時、茜の顔が少しまともになつた。

茜「天の御使いは私ですが……」

貂蝉「アナタがそつなの？」

茜「少なくとも占いで言つてはいるのは間違いなく私です」

貂蝉「この世界の占いはどんななの？」

茜「たしか《天より流星が舞い降りし時、紅き衣を纏いし者現る。その物は、異能の力で乱世を平和へと導く天の御使いである》だつた気がします」

それを聞いた貂蝉は何故か複雑な顔になつた。

茜「こちからもいいですか？」

貂蝉「あら、何かしら？」

茜「单刀直入に聞きます、貴方はこの世界の人ですか？」

茜は貂蝉に妙な質問をした。

貂蝉「どうごう事?」

茜「先程あなたは私に」「この世界の占いはどうななの?」と聞きましたね?

まるで他にもこの世界がある用な物言いです

貂蝉「!...」

図星を突かれて貂蝉は顔をしかめた。

茜「どうやら本当に見たいですね、そして先程の質問からして貴方はその世界にも行っている、貴方がこの世界の人でないのは確かです」

貂蝉「アナタは一体何者なの?」

茜「性は姫、名は神、字は刀赤、真名は茜です。前の名前は姫神茜、異世界を旅する者です」

貂蝉「そう……」

茜「詳しく聞きたいので近くの町までついて来てください食事位ならおひりますよ」

どうやら貂蝉と町に行く事が決まつたらしい。

貂蝉「あら、中々氣前がいいのね？」

茜「あまつ近づかないでください、暑苦しげですのです」

貂蝉「だあああれが

夏の日差しが涼しく感じる程暑苦しくて、
冬の寒さが暖かく感じる程の寒気を『え』る
歩く環境破壊ですってええええ！――」

茜「いえ、そこまで言つてしませんが……」

シリアスな状況のままではいられない、貂蝉であった。

現在、茜と貂蝉は町のある食堂にいる。茜はただでさえ赤い執事服の用な服といつこの世界では田立つ格好である。それを隣が貂蝉である、明らかに茜達はすぐ田立っている。だが場所が場所なので見たら食欲を失うので、見ていないフリをしているのだ。

茜「それでは説明してもらいましょう」

貂蝉「そうね、どこから説明したらいいかしら?」

茜「この際あなたの正体はどうでもいいです問題はこの世界が何なのかですか?」

貂蝉「わかつたわ、まずこの世界だけどアナタは歴史を知っているかしら?」

茜「はい、ですが此処とは違います」

貂蝉「そう、アナタの知っている本来の歴史を正史、そしてこの世界の事を外史と言つの」

茜「外史……作られた歴史ですか?」

貂蝉「ええ、外史とは正史の人間がこつあつたらいいという風に考えられて作られる世界の事よ」

茜「つまりこの世界もその外史の一つと言つ事ですか?」

貂蝉「ええ、ただし起点が違うわ」

茜「起点?」

貂蝉「北郷一刀、それが本来の起点よ」

茜「天の御使いですか?」

貂蝉「正確には天の御使いにされた未来人よ」

茜「私と同じですね」

貂蝉「ええ、だけどこの世界の起点は北郷一刀ではなく……」

茜「私……」

貂蝉「そう、この世界は既にアナタの外史なの」

茜「つまりこの世界は私が主人公の世界でこの世界がどうなるかは私に委ねられてくるといつ事ですね？」

貂蝉「簡単に言えばそつなるわね」

茜「…良かつたです、ならやめととした通りにやるだけです」

貂蝉「何をする気なの？」

茜「この世界のつながりを守るためにこの世界を平和にします」

貂蝉「あらあら大きく出たわね」

茜「一人では難しいでしょうが、私には既に仲間がいます。仲間と力を合わせれば、必ずできます。貂蝉、あなたはどうしますか？」

貂蝉「どうするついて？」

茜「貴方もこの世界にいる限り、この物語の登場人物です。貴方さえ良ければ私と共にこの世界を平和な世の中に導きませんか？」

貂蝉「あらあら、今回の外史は中々面白いわね。わかつたわこれか

「うよりしきね」ご主人様」

茜「ありがとうございます。ですが、出来れば」ご主人様とは呼ばないで下さい」

貂蝉「でも、ご主人様はご主人様だから」

そんなやりとりをしていたその時、

? 「たつたたた大変だあああああつ！？」

一人の若い男が慌てながら食堂に飛び込んできた。

女将「どうした！、何があつたってんかい！」

女将が若者にそう聞くと、

若者「こつ黄巾党の集団が！」の間に迫ってきてるんだ！それもものす」とい数が来てる……」

若者は息を切らせながらそう答えた。

女将「太守様はどうしたんだい？、これだけ大騒ぎなつてたら軍が動く筈だよ？」

疑問に思つた女将が再び若者に聞くと、

若者「せつ……それが……」

若者はまだ驚つて一息を吸い落ち着いてから、

若者「逃げちまつたんだよ……、報せを聞いた途端に兵を全部連れて逃げちまつた……！」

セツ、

『何いにいにいにいつーーー。』

食堂全体に衝撃が走った。

茜「貂蟬、まあまじの醜態を鎮めてくれ」

貂蟬「わかったわ」

セツ、

貂蝉「十九十九十九十九……」

貂蝉は深く息を吸い込み、

貂蝉「ふふああああああああああ……」

この世の者は思えない特大の叫び声を出すと、

『……』

周つの謡れは一気に鎮まつた。

茜「あらがとうござむす」

やう言ひと茜は若者の方を向き、

茜「黄巾党はどう位來てまか?」

と聞いた。

若者「…くつ？」

聞かれた若者は呆けた声を出すが、

茜「ですから、此処に向かってきている黄巾党の数はどれ位来てるか聞いているなんですが？」

茜が改めて聞き直すと、

若者「たつ確かに見た感じだと…一千ぐらいの箇だ」

若者は思い出しながらうなづいた。

茜「わかりました、貂蟬」

貂蟬「わかってるわ」

そつ言いつと茜は横に置いといた紅を手に持つて席を立ち、

茜「行きますよ」

食堂を出よつとした。

若者「ちよ、ちよつと待て、どこに行くんだ？」

だが若者が茜達を止めた。

茜「黄巾党を倒しに行くんですが？」

若者「話を聞いて無かつたのか！ 黄巾党は千ぐらいいるんだぞ！ た
つた一人で何が「倒せます」は？」

茜「黄巾党千人で私が負ける筈ありません」

若者「何いってんだ！ 勝てるわけ「まちな」何で止めるんだ女将！」

女将「いいからまちな、兄ちゃんのその格好、もしかして天の御使
いじやないか？」

女将がそう言つと、「天の御使い？」「そういえば…」などの声が
出た。

茜「はい、私は姫神刀赤、天の御使いです。行きますよ貂蟬」

そう言って食堂を後にした。

そして茜達は黄巾党の所まで来たのだが……

「アーリー、アーリーなんだな」

そこにはさつきの三人組がいた。

? 「ちょっと、バケモノってホントにバケモノじやない！
もつとうねうね動いてキモカワイイのかと思つたら、本氣でキモイ
だけじやない！！」

すると三人の少女が出て来て水色の髪の少女が貂蝉を見てそう言つた。これを聞いた貂蝉は、

貂蟬「だあああれが山からワイワイ下りてきた、

物の怪キモ力ワ大行進ですつてええええーー！」

水色「そこまで言つてないわよーー！」

壯絶な聞き間違いをしていた。

? 「あ、でもあの赤い髪の人結構かっこいい。お姉ちゃん、あの人
もへらい」

茜「?」

すると今度はピンクの髪の少女が茜を見て言つた。どうやら氣に入
つたらしい。

貂蝉「アタシのご主人様をあらあら大変、こんなにたぎつちやつて
どうしましょうににするですつてえええーー！」

ピンク「そこまで言つてないよーー！」

貂蝉は再び壯絶な聞き間違いをした。

茜「ん？あの、そこの人」

鬚「ああ？なんだ？」

茜「先程そここの太つた人が「こいつなんだな」って言つてましたが皆さんの目的はひょっとして町ではなくコレへの仕返しですか？」

茜は貂蝉を指差しながら聞いた。

髭「当たり前だ！そいつをぶち殺すにはこれぐらいは必要なんだ！」

茜「という事は貂蝉、彼らが町に向かつてたのは貴方のせいではないですか？」

貂蝉「そつ言つ事になるのかしら」

茜「はあ、取りあえず倒しましょうか」

貂蝉「そつね、もう倒すつて言つたやつたし」

茜「ですね、どうせ黄巾党は敵ですし」

そう言つと茜は紅を抜いて、

茜「天の御使い姫神刀赤、参ります」

貂蝉「絶世の美女貂蝉ちゃん、行くわよおおおおおおんーー！」

貂蟬と共に黄巾党へ向かつて行つた。当然黄巾党がこの一人に勝てるわけがなく、一刻もしないうちに黄巾党は殲滅された。因みに三人の少女には逃げられた。

一方町では、

町民「御使い様は、私達の英雄だ！」

町民「おい！御使い様を、迎える準備だ！」

町民「ああ！」

町民達が、茜の迎えの準備をしていた。

町民「ありがとうございます！」

町民「貴方様のおかげで、町は、救われました！」

茜「そんなに、かしいまいりないでください」

茜は、町民から感謝の言葉を聞いているが、

茜「（あの黄巾党は貂蝉を殺した後この町を攻めたでしょうか？攻めましたね、きっと攻めた筈です）」

少し現実逃避をしていた。

若者「御使いの兄ちゃん！」

あれとにかくそれらの若者が走ってきた。

茜「何ですか？」

若者「実はこの巴都は今役人が逃げて、街の者達だけで何とか運営している状態にあるんだ」

「いやあでくると何が言いたいのか解つてくるが茜は黙つて若者の話

を聞く。

若者「是非、兄ちゃんに」の巴都の指導者となつてほしいんだ、失礼を承知で頼む」

そう言つて若者は頭を下げた。

茜「頭を上げて下さい、私もそろそろ拠点がほしいと思つた所なんです」

若者「じゃあ！」

茜「はい、今日から私がこの町の太守です」

全員「おおおおおおおおおおおお！」

茜がそう言つと、町人達は歓声を上げた。

貂蝉「よかつたわねご主人様」

茜「ええ、これで本格的に活動出来ます」

貂蝉「こうなつたらアタシ、一肌でも一肌でも全裸になるまでも脱いであげるわよん？」

茜「やめて下せー、気持ち悪いですので」

貂蝉「だあああれがむじつ二年二ヶ月、
毎夜毎晩夢に出て来るほど気持ち悪くて、キモイキモイと蛙の如く
輪唱しそうになるですってしまえええ！！」

茜「いえ、そこまで言つてしませんが……」

こうして、茜は拠点となる場所と変わった仲間を手に入れたのであ
つた。

漢女（おひめ）×外史×黃巾党（後書き）

見ましたよね？気持ち悪かつたですよね？

すいません、ある意味一番出したかったキャラなんです。受け止めてください。

次回、あわわと鈴の人を仲間にするつもりです。

違つたらすいません。

あわわ×鈴×召集

茜が巴都の太守になつてから、巴都は急激に成長している。

茜は元々未来やそれ以上の知識を持つてるので政務は柔軟な発想が出来る。

そして警備については日本の警備態勢を応用した。

それでも限界があるので、町の子供に穴埋めをしてもらひ。子供は、大人の目につかないところに田をつけるから不審者などを見たら通報してもらい、「褒美をあげる」という感じでやつた結果、殆ど問題は起きてもすぐに解決できる。

だがそれでも解決出来ない所もあるのでその時は茜自信も警邏に出で問題を自らの手で解決する。茜は武は一騎当万、知も申し分なし、更に様々な能力を持つていてはつきり言つて完璧超人である。そんな茜が問題を解決出来ない事などくまれにしかない。因みに問題を起こした者は貂蝉のO・S H I・O・K I Eが待つてるので問題を起こす者も急激に減つてきている。

次に資金だが茜は未來の知識で塩の製造が成功している。この時代塩は中々高い、だが茜には塩の製造が出来るので塩には余裕があり、本来の値段よりも安く売つても茜は十一分に特をしている。当然塩は完売するがそれでもまだ塩には余裕があるので、現在は味噌の製造をしている。

そして現在、茜は兵を集めるために義勇軍を募集したのだが……

茜「なんですか？」
「……」

茜の前には既に10000の兵がいる。実は茜は旅をしながら色んな町を守っていた事でかなり人気がある。だからこそ志願兵や助けてもらった恩返しの為にどんどん集まつた結果がコレである。

茜「私は人気があるんでしょうか……それとも何かの夢」

だが、茜自信は当然の事の用にやつていたので実感などわからないのである。

茜「取りあえず集まつてもらつたものはしおりがないですね。正に棚からぼた餅ですね」

それは、かなり違つた茜……

? 「あ……あのう」

茜「ん？」

すると突然誰かが茜を呼ぶような声がした。

キヨロキヨロ

だが周りを見てもそれらしき人物は誰もいない。

? 「あ…あのう、」じちでしゅ、あわわ……」

今度ははつきりと聞いた茜は声のしたほうを見ると……

? 「あわわ……」

ハロウィンね魔女の用な帽子を被つた幼女の用な少女が茜を上目遣いで見ていた。

茜「えっと、先程私を呼んだのは貴女ですか？」

少女「は、はい…あの、貴方は天の御使いの姫神さんでしょうか…」

茜「はい、確かに私は姫神刀赤と言いますが貴女は？」

少女「…わ、私は鳳統といいましゅ……」

幼女の用な少女、鳳統が名乗る。

茜「（鳳統：確かに三国の一つ、蜀の名軍師、諸葛亮の友で鳳雛とも呼ばれた軍師ですね）それで鳳統ちゃんだけ、私に何か用ですか？」

鳳統「……あ、あの……私を仲間にしてくれだしゃい……お願いしましゅ……あう」

鳳統は何度も囁みながらも何とか用件を伝えた。

茜「鳳統ちゃんだけ、君は此処まで一人で来たのかい？」

鳳統「い、いえ……途中までは友達と来ました……友達は劉備さんの所に行きましたが……私は御使い様に興味がありましたので……」

茜「（鳳統の友達と言つ事は、諸葛亮ですね）そうですか、ですが……何故私に」

鳳統「あわ……み、御遣いしゃまの噂と本を読んで、興味を抱いたからでしゅっ！」

うう……囁んじゅった

茜「本？ああ、あれですか」

茜や鳳統が言つてゐる本と書つたのは茜が旅をしながら暇つぶしに書いていた旅の記録や横文字との意味が書いてある本の事である。因みに茜の旅の記録はそんじょやいりの物語よりもすゞこ冒険が記されたりして中々好評である。

茜「読んでくれたんですね、どうでしたか？」

鳳統「は、はい…面白かったです」

茜「ありがとうございます。それと、本題に入ります」

そう言つと茜は鳳統の頭に手を置いた。

茜「私の真名は茜です、私の仲間になつて下せー」

鳳統「わ、私の真名は離里でしゅ」

茜「はー、これからよろしくお願ひします離里」

そう言って茜は、離里の頭を撫でる+爽やかスマイルといつダブルコンボを炸裂した。

離里「あ、あわわ…」

「どうやら落ちたらしき。

「うひして茜は蜀の名軍師、鳳雛を仲間にしたのだった。

茜「それと、これは続きですけど読みますか」

雛里「は、はい！」

出来てたのか……

現在、茜は遠出に出ている。

確かに茜は完璧超人である。だがどんな完璧超人でも限界はあるもの、それは茜も入る事である。

雛里が仲間になつてから、政務で茜に回つてくる書簡もかなり減つた。だが、それでも普通なら半日かかる量の書簡を五時間で終わらせる茜はたいしたものである。それを茜は既に一週間やり続けている。だから休憩もかねて茜には1日休みが出来たので茜は遠出に掛けたのだ。

茜「たまこはいへこつのもいこですね」

そして今茜はある森の小川にいる。

茜「ん？ あれは……」

あると茜はある物を見つけた。

茜「桃ですね」

茜「むべ、めいじいですね。雛里にペーパーチパイでも作ってあげますか」

やつぱり茜はこくつか桃をとった。

茜「じんなどひですかね、雛里喜んでくれますかね」

茜は雛里の笑顔を想像しながらそつぱりした。

茜「さて、帰りますか……と、その前に」

すると茜がある方向を見て、

茜「そんなの出て来たらどうですか？」

やつに言つた。

ガサガサ

? 「.....」

すると数人の男が茜を囲む用に現れた。

茜「黄巾党ではないですが、賊の用ですね」

やつに言つて茜は腰にわざしてある紅を抜いた。

茜「（ん？、ふふふ）」

茜がある事に気付いて心の中で笑つていると、賊の一人が茜に向か

つて剣で斬りかかつってきた。

スツ

だが茜は少し横にズレるだけでかわし、

ドガッ

賊の頭を紅で峰打ちして氣絶させた。

茜「一人ずつでは倒せませんよ」

茜がそいつと、左右の賊と後ろの賊が茜に斬りかかつた。

茜「（他の賊に比べると連携がとれてますね、ですが……）」

だが茜は後ろに向かって一回転するように跳んで後ろの賊の更に後ろに回り込み、

茜「（まだ甘いです）」

賊の頭に蹴りを喰らわせた。

茜「ほら、もっと頑張つて下さい」

その後も賊達は複数で連携して茜に斬りかかつたが茜はそれを華麗に交わして徐々に賊の数を減らしていき、賊は既に一人になつていた。

茜「もう終わりですか？」

賊達も既に戦意を失いかけていたその時。

チリーノ

茜「（ん？鈴の音？）」

？「苦戦してるよつだな」

すると賊の後ろから剣を逆手に持つた女が出て來た。

賊1「お頭！」

賊2「甘寧様！！」

茜「（あの人気が甘寧……）」

茜は甘寧を見て何かを思つたらしく。

甘寧「…………」

甘寧は武器を構えて茜を睨む、茜も紅を構えて甘寧を見据える。

甘寧「はあっ！..」

最初に甘寧が斬りかかった。

茜「（速いですね）」

ガキイイイイイイン

茜はその一撃を、紅で防ぐ、

甘寧「チャイツー。」

茜「ふつ。」

そのまま、力任せに押し返した。

茜「（速さは中々ですね、ビーナス彼女は速さと手数で勝負するみたいですね）」

甘寧「ふつーはつー…せこつー…。」

甘寧は更に茜に連撃を繰り出すが、

ガキン　バキン　ギャキン

茜はそれを全て紅で受け流す。

甘寧「（完全に見切られてるー。）」

茜「それから、終わりにしましょ。」

そう言いつと茜は甘寧の攻撃を受けずに避けた。

甘寧「一。」

甘寧も今まで攻撃を受け止めていた茜が突然避けた事に驚いた。

茜「ふつ」

ガキン

茜はその隙を見逃さず甘寧の持っている剣を蹴り飛ばした。

チャキ

茜「終わりです」

そう言って茜は甘寧の首に紅を突き付けた。

甘寧「く、殺せ……」

甘寧は茜に自分を殺すよといつたが、

賊1「待ってください！」

賊2「我らは死なつてもいいですから甘寧様を殺さないでください」

賊達が土下座をして頭を下げながら甘寧を殺さない用に頼む。

茜「？何故殺さないといけないんですか？」

だが茜が言つたこの言葉に、甘寧や賊達は何言つてんだこいつ、といつ用な田をした。

茜「周りをよく見て下さい、倒れている人はみんな氣絶しているだけです。私は元々貴方たちを殺すつもりなどありません」

甘寧「貴様何を言つてる、私達は貴様を殺そつとしたんだぞ」

甘寧は自分が殺されない事に何か不満がある用だ。

茜「貴方たちが殺そつとしたから私が殺さなければいけないわけではありません。それに、貴方たちには賊以外に道があると思います」

甘寧「どうじう事だ……？」

“どうやら甘寧達は茜の言つている事の意味がわからないらしい。

茜「私は何も考えずに貴方たちを生かすわけではありません。本来賊に成り下がつた人は目に濁りがあります。ですが……」

そして茜は三人の目を見る。

茜「貴方たちの目には、曇りはありますが濁りは微塵も感じません。貴方たちは賊ではありますが、賊に成り下がつてはいません。貴方たちには他に道があります、だから私は貴方たちを生かすんです」

甘寧達は茜の話を静か静か聞いていた。

茜「そこでものは相談なんですが、皆さん私の仲間になりませんか？」

三人「「「は?」」」

三人は茜の言つている事がわからなかつたらしい。

茜「申し遅れましたが、私は性は姫、名は神、字は刀赤、巴都の太守をしています」

甘寧「姫神刀赤……まさか、貴様天の御使いか……」

茜「はい、確かに私は天の御使いです。それと、先程の誘いですが無理にとは言いません。私は巴都で待つてますのでもし仲間に気が変わつたら巴都に来て下さい。では……」

そついつて茜はその場を後にした。

それから数日、

茜「雛里」

雛里「ひやーーー」、「ご主人様……」

雛里は城庭で本読んでいる最中、突然茜に話しかけられた。

茜「離里、実はピーチパイを作ったんですが一緒に食べますか？」

やつらの茜の手にはピーチパイがあった。

離里「ぴーちぱい？」

茜「ああ、すいません。桃を使った甘いお菓子です」

離里「お菓子、じ主様が作ったんですか？」

茜「はい、この前の休みに遠出をした時においしい桃を見つけたので幾つかとつてきたんです」

離里「そつなんですか、ありがとうございます。いただきます」

茜「はい、宜しければ貴女も食べますか？」

離里「へ？」

茜がある方向を見てやつらの

チリーン

甘寧「…………」

そこから甘寧が出て來た。

雛里「あ、あわわ……」

茜「大丈夫ですよ雛里、遠出の時に知り合つた人です」

雛里「そなんですか？」

茜「はい、それで甘寧さん、どつこづく用でしうか？」

茜がそう聞くと、

甘寧「姫神殿……」

スツ

甘寧は突然跪いた。

甘寧「お願いします、私を貴方に仕えさせて下さい」

茜「他の人はどうしたんですか？」

甘寧「他の者は賊を解散した後、それぞれの故郷に帰つていきました」

茜「えうですか、それで甘寧さんは貴女は？」

甘寧「私はあの時の姫神殿の言葉と優しく心を打たれました。どうか、私を仕えさせて下せこ」

そう言つて甘寧は頭を下げた。

茜「…………甘寧、私の真名は茜です、これからは茜と呼んで下せこ」

甘寧「では…」

茜「はこ、よろしくお願ひします」

甘寧「はこ、私の真名は思春です」

茜「まここれからよろしくお願ひします思春」

再び茜の爽やかスマイルが発動した。

思春「…………／＼／＼」

思春は落ちた。

茜「ではまずは三人でピーチパイでも」

食べましょと続けよとした時、

貂蝉「クン、クンクン、あらんご主人様達だけでおやつだなんてず
るいわ。アタシもご主人様のお菓子食べたいは、むしろご主人様を
食べたいは？」

バケモノが文字通り嗅ぎつけてきた。

離里「ひつ……」

貂蝉の姿を見て離里は怯え、

思春「おのれバケモノ、茜様に何をする気だーー！」

思春は貂蝉を警戒していた。

貂蝉「だあああれが怪奇巨大怪獣、旅の武人は見た、巴都にあられ
た人外の獣、ですってえええーー！」

思春「そこまでいってないだろー。」

最後の最後で場を乱す、貂蟬であった。

茜「離里、そろそろ仲間を召集します」

離里「召集、ですか？」

茜「はい、兵も兵糧も大分揃いましたのでそろそろ本格的に動こうと思います」

離里「そうですか、わかりました。」

茜「はい、それではコレを幽州、荊州、陳留に送つて下さー」

やつぱり茜は三枚の紙を出す。

離里「御意です。所で、この主人様、思春さんは何処にいるんですか？」

茜「思春でしたら私が仕事に出します。内容は帰った時に教えます」

離里「わかりました、では……」

やつぱり離里は部屋を出て行った。

茜「ふふ、離さん元気のは久しぶりですね、元気にしているでしょつか」

和氣藪々としながら、茜はその日の仕事を終わらせた。

あわわ×鈴×召集（後書き）

以上です。

やはりキャラ崩壊が激しいですね、
本当にすいません

ですが思春はお気に入りキャラの一人なんです。なんとか受け止め
て下さい。

次回、仲間が集合します。

全ての仲間を混ぜ合わせるのはかなり骨が折れると思います。

鉢合わせ × 再会 × ? ? ?

凪「此処が巴都……やつと茜様に会えるのか…」

巴都の前に一人の少女がいた。彼女の名は凪、茜とつながりを持つ者の人である。

真桜「は～やつと着いたでー」

沙和「沙和もう歩けないのー」

そしてその直ぐ側に同じくつながりを持つた少女、真桜と沙和がバテていた。

凪「いらー人共、これから茜様に会うんだぞ」

真桜「せやかて疲れたもんはしゃあないやろ」

沙和「それに凪ちゃんはいいの、茜さんから貰った力があるから」

凪が茜とつながりを持つて手に入れた能力は『内氣功』(ないきこう)、自然の中にある氣を吸収して自分の氣にする力、自分自身の氣は一切使わないから氣をいくら使っても疲れない。

凪「私は茜様から貰つた腕輪を風呂と戦い以外は外さないから殆ど使わないぞ、それにその理屈だと沙和もそうだろ」

沙和の能力は『お洒落アイテム』、頭の中に想像したお洒落アイテムを一つまで出せ、着ける事で体力と脚力を強化する力、因みに沙和は髪飾りと首飾りを出したが可愛いからという理由でずっと着けている。

沙和「それでも体力には限界があるの」

真桜「ちゅうかそれやとウチなんもないから一番疲れとるで」（泣）

真桜の能力は『超発明』、ただ単純に発明の成功率を上げるだけである。

沙和「でも真桜ちゃんその力で色々作つて楽しそうなの」

真桜「楽しそうやない…楽しいんや！」

沙和の言つ通り、真桜はこの能力を自分の趣味である絡繕り作りに生かして様々な絡繕りを作つている。

凪「それでも失敗が多いけどな…」この前だつて料理を作る絡繕りで

失敗したじゃないか……」

真桜「ああ、味良し三郎くんの事か…あれはちょっと間違えただけや…」

凪「つまり真桜のちょっととは包丁が全部飛ぶのか……」

沙和「あの時は死ぬかと思ったの?」

因みにその時飛んだ包丁は何故か全部沙和の方向に飛んでいった。

凪「いつそのこと壊してしまおつか…」

真桜「そんな殺生なー!」(泣)

沙和「殺生するのはあの絡繰りなの……?」

真桜「誰が上手こじと喧々と一つー!」

凪「それだけ元気なら大丈夫だな…早くいぐぞ」

そつ言つて一人を無理やり連れて行こうとした時、

星「ねやーお主は何者だ?」

そこに、星、風、稟の三人がやってきた。

凪「人にものを訊ねる時は、まず自分から名乗るのが礼儀では？」

星「おや、これは失敬、私は趙雲、この国の太守、姫神殿に呼ばれてやってきた」

風「風は程立といいます」

稟「私は郭嘉と申します」

凪に正論をいわれ、三人はそれぞれ名を名乗った。

凪「え？ 貴女たちも呼ばれたんですか？」

郭嘉「貴女たちも」という事は貴女たちもですか？」

凪「はい、私は樂進と申します。私も茜様に呼ばれてやって来ました」

真桜「ウチは李典や、よろしくつな」

沙和「沙和は迂禁なのー」

星達が茜の仲間だとしると、凪達も名乗つた。

稟「茜殿は仲間を増やすのに成功したみたいですね」

風「それもみんな女の子ですねー」

星「主は私達の他に恋人を作ったようだな」

凪「こ、恋人だなんてそんな…！」

星「何だ…違うのか……」

星は自分の想像と違つた事がつまらないようだ。

真桜「ちゅうか姉さん達は兄さんの恋人なん?」

稟「一応そう言う事になりますね」

風「お兄さんは出会つた初口に風達に手を出しましたー」

星「あの時の主はすぐかつたぞ」

沙和「ええ！お姉さん達茜さんとそんな関係なのー？」

真桜「初日から手を出すとはさすが兄さんやな…」

凪「茜様…不潔です……」

三人は茜との関係を聞いて沙和は驚き、真桜は呆れ混じりに茜を讃

め、凪は茜の事を軽蔑していた。

星「何ならお主達も交わればよからぬ」

すると星が突然とんでもない爆弾発言をした。

凪「わ、私は別にそいつわけでは「沙和はいいのー」「ウチも兄さんやつたらええで」ふ、二人共！」

だが星の一言で凪は慌てだし、沙和と真桜は乗り気だった。

真桜「なんや、凪は嫌なんか？」

凪「い、いや……べつに嫌といつわけでは……」

沙和「じゃあ茜さんの事好き?」

凪「それは……わからない……」

凪は難しそうな顔をしながら囁いた。

風「それじゃあお兄さんの笑顔を見ていると何か自分に変る」とは

ありますかー？」

風が聞いてみた。

凧「茜様の笑顔を見ると……胸の鼓動が早くなったりします」

凧は正直に答えたに違いない。

星・風「…………」

星と風は顔を見合させて何かを思つたみたいだ。

星「では主が他の女性と話していたらどう思ひます?」

星が聞いてみた。

凧「え！？他の女性の人と・・・それは嫌です」

ちよつと暗い表情になつたが答えた。

星「風、これは…」

風「間違いないですねー」

凪「何かわかつたんですか…？」

星と風のやりとりを見ていた凪は、少し不安な表情で一人に聞いた。

星「うむ、お主は主に惚れている

風「それも、確實ですー」

凪「私が…茜様に惚れて……／／／」

凪は自分が茜に惚れていると知つて顔を赤くした。

真桜「なんや、やっぱり惚れてたんやなー」

沙和「強敵現るなのー」

凪「? 強敵とは、どういつ事だ?」

真桜と沙和の発言に凪は気になつたらしい。

真桜「つまり、兄さんに惚れてるんは廻だけやないつちゅう事や」

「何! ことは……」

沙和「真桜ちゃんも沙和も茜さんの事好きなの」

「いつからだ？」

沙和「えつと、初めて笑顔を見た時に心臓の鼓動が早くなつたのー、そして茜さんの事をもつと知りたいと思つたのー／＼／＼」

真桜「確かに兄さんの笑顔は凶器やからな／＼／＼

言いながら一人は頬を染める。

星「ならば先程も言つた用にお主達も主と交わつて恋人になればよ
かるづ」

そこへ星が先程の爆弾を再び投げた。

「貴女たちは、私達が茜様と関係をもつても問題がないんですか

?

凪が星達に聞いた。

星「フーム、問題はないな」

風「英雄色を好むですよ」

沙和「茜さんは英雄なの?」

風「えりつと英雄なのでよー」

ところのよつた会話をしている途中、

真桜「あれ? そつまくれば眼鏡の姉さんはずいぶんや?」

稟が先程から何も言つてこない事に真桜が気が付いた。

風「稟ちやんなら?」ですねー」

そう言つて風がある方向を指差すと…

稟「…………」ピクピク

稟が鼻血を出してピクピクしながら倒れていた。多分、交わるといつといふが引っかかったのだろう。

星「風は気付いてたのか？」

風「風達が質問を始めた辺りから倒れました、はーい稟ちゃん、とんとんしますよー」

そつまつて風がいつもの用に稟の首筋をとんとんすると、

稟「フガフガ」

稟はいつもの用に復活した。

凪「あれば、何なのだろうか…」

沙和「どう受け止めたらいいかわかんないの…」

真桜「いや、そもそも受け止めていいんやろ？が…」

そしてそれを初めて見た三人は軽くひいていた。

?「な、何ですか！これは」

そこに田舎の星と亞莎がやつてきた。来た。

凪「また茜様の仲間でしょうか？」

星「分もつであります」

風「お兄さんは好き者ですねー」

亞莎「え？え？」

この後、先程の用なやつとりが再び起つた。当然、稟の鼻血も含め。

凪「とりあえず中に入ります」

そう言って凪達は中に入ろうとしたら、

星「お主達の手紙には入る用書はあるのか？」

星が妙な事を聞いた。

凪「どうごう事ですか？」

稟「私達の手紙には門の前で待つてゐる用書かれてるんです」

亞莎「私のにも書いてあります」

そつ言つて稟と亞莎は自分達の所に届いた手紙を出した。

真桜「あ～そつ言えばそないな事書いとつた氣にするな…」

沙和「なの…」

実は凪達に届いた手紙は真桜と沙和が読んで凪に伝えたので凪は手紙の内容は知らないのである。

凪「そんな重要な事忘れるな！」

そつ言つて凪は腕輪を外し両手に氣を溜めだした。

沙和「わー、凪ちゃん待つてなのー！」

真桜「ウチうが悪かつた！もつせえへんから許してー！」

凪が氣を溜めるのを見て一人は慌てて謝る。

凪「反省したか…？」

真桜「コクコク」

沙和「コクコク」

凪に聞かれて二人は首が千切れんとばかりに激しく縦に振った。

凪「…わかった」

そう言って凪は氣を抑えて再び腕輪をはめた。これを見て一人はホッとした。

凪「ですが何故外で待つのでしょうか？」

亞莎「手紙には迎えが来ると書いてあります」

星「だとしたらその迎えは…」

ビート「いふと続けようとした時、

貂蝉「むつふうううううううううんつーー！」

そこにバケモノ」と貂蝉が現れた。

全員「…………」

そして貂蝉の姿を見た七人は余りの衝撃に言葉を失った。

貂蝉「どうやら全員揃つてるみたいね、ご主人様の言つた通りだわ」

真桜「なあ…ウチの旦おかしなったんかな…なんや旦の前に筋肉達磨がみえるで……」

沙和「大丈夫なの真桜ちゃん…沙和にも見えてるの……」

凪「幻ではないらしい…………」

星「だとしたらお主は何者だ?」

貂蝉「あたしの名前は貂蝉、ご主人様に頼まれて貴女たちを迎えて来たわ」

亞莎「という事は…貴方が迎えなんですか…?」

亞莎は怯えながらも貂蝉に質問を投げ出す、違つ事を祈りながら…

貂蝉「ええそりよ（舌だしウインク）？」

貂蝉の舌だしウインクを見た全員に寒気が走った。

沙和「真桜ちゃん…今ゾゾッてきたの一……？」

真桜「奇遇やな…ウチもや……？」

凪「私も……？」

亞莎「きゅー」

バタン

風「この人もお兄さんの仲間ですかねー」

星「いや…そもそも人なのだろうか…？」

稟「…お化け…」

貂蝉「だあああれが背後靈にしてはえらく肉感的で、存在感在りす
きて困っちゃうわ、ですってえええーー！」

全員が各自の意見（一人は氣絶）を出す中、貂蝉は稟がぼそりと呟いた一言に反応した。

稟「はい」

バタン

風「はーい稟ちゃん、とんとんしますよー」

何故か稟が鼻血を吹き出して倒れた。

貂蝉「入つて…驚いた時にも鼻血を出すのね、一つ賢くなつた気がするわ」

こんなやりとりをしながら、一行は貂蝉に案内されながらも城へ向かつた。因みに亞莎と稟は途中で目を覚ました。

茜「お久しぶりです姫さん」

星・稟・凪・亞莎「お久しぶりです主（茜殿）（茜様）」

風・沙和・真桜「会いたかったです（でー）（のー）」

貂蝉に案内されて、現在七人は玉座の間にいる。

星「ところで主、早速で悪いですがコレも主の仲間ですか？それとそちらの少女は…」

星が貂蝉と離里をさしながらいった。

茜「はい、こちらにいるのは鳳統といってここの大守になつてから仲間になつた軍師です。それとそちらは貂蝉です、自称絶世の美女らしいですが厄除けの置物とでも思つて下さい。実際厄も裸足で逃げそうですし」

茜はとても爽やかな笑顔で言い切つた。いつもはみんなを魅了する茜の爽やかスマイルも今回は効果なく、みんなは茜の言つた事を心中で肯定するだけである。

貂蝉「そんな事言わないで言わないでちょうどいい、まるでアタシがバケモノみたいじゃない…」

茜「実はもう一人仲間がいるんですが今は仕事中です」

貂蝉「わつ無視？酷い酷いわ……」

茜に無視された事を気にして貂蝉はその場につづくまつた。そして茜はそれでも無視しているのでみんなも気にしない事にした。

茜「じゃあ帰つて来たみたいですね、思春、出てきて下せー」

茜がそいつに

思春「茜様：ただいま戻りました…」

何もない所から突然思春が出て來た。そして茜意外の全員は突然出て來た思春に驚いた。

因みに思春の能力は茜が呉に行つた時に使つた『キャトルカム』である。

茜「紹介します、彼女は甘寧と言つて先程言つた仲間です。思春、報告は後でいいですからまずは食事にしましよう。皆さんも此処まで來るのに疲れたはずです、皆さんの分もありますので食べましょう」

そう言って茜がさしたのは机に乗つた沢山の料理である。

真桜「さすが兄さんやー。」

沙和「沙和もつお腹空いたのーー。」

凪「ありがとうございます茜様」

星「メンハマもあつますか?」

亞莎「茜様の料理…」

全員は各自の意見を語り合った。

稟「見た」とのない料理ですね」

稟の言ひとおり、机の上にはナポリタンやケーキなどの用なしの世界にはない料理がたくさんある。

茜「これは私の世界の料理なんです」

風「これはお兄さんが作ったんですかー?」

茜「いえ、私にも作れますが作ったのは私ではありません」

星「どうこの事ですか?」

茜「二人とも、入つて来て下さい」

ガチャ

茜がそう言つと、二人の人物が入つてきた。

一方は茜より少し大きいぐらいで子供なら軽く睨むだけで泣き出し
そうな鋭い目つきの紫の髪の男性である。もう一人の方は風や雰里
と同じぐらいの大きさで氣の弱そうな感じの緑の髪の男の子である。

だが、その二人の顔にはある一致点があつた。

凪「茜様が……三人？」

全員が一人の顔を見て驚いた。何故なら、凪の言つとおり、二人は
表情や雰囲気意外は容姿も髪型も茜と全く同じだからである。

茜「紹介します、私の兄弟です」

全員「…………」

茜のこの言葉にその場に沈黙が走り、

全員「ええええええええ！」

次の瞬間、部屋に驚きの声が響き渡つた。

何故茜の兄弟がこんな所にいるのか…

鉢合わせ × 再会 × ? ? ? (後書き)

とこの感じです。中途半端に終わってすいません。

茜の兄弟を出したかつたんです。

次回、兄弟の説明これからの方針です。

気に入つてもらえると嬉しいです。

兄弟×料理×方針

全員が揃う少し前、

茜「そう言えば離里は縁に似てますね」

離里「みどり？」

茜「私の弟です」

離里「ご主人様には兄弟がいるんですか？」

茜「はい、弟が六人と兄が五人いて私を入れて十二人兄弟です」

離里「じゅうに…」

余りの兄弟の多さに離里は驚いていた。

茜「その弟の一人に縁と言つ子がいて雰囲気が離里に似てるんですね」

離里「雰囲気…ですか？」

茜「はい、体格から性格までよく似ています。それに…」

すると茜は離里の頭に手を置いた。

茜「緑は焦つたり照れたりするじょく、ふわわって言つんだす」

そつ面つて茜は離里の頭を撫でだした。

離里「あわわ……／＼／＼」

茜「やはうこてますね……」

茜は頭の中で自分の兄弟の事を想像して少し微笑んでいた。

ド「オオオオオン

茜「ん？」

離里「あわうー！」

すると突然妙な轟き音が聞こえた。

茜「城庭の方からですね、ちょっと見て来ますので離里は待つてて
ください」

雛里「は、はい…」

雛里のその言葉を背に、茜は城庭に向かつた。

城庭

茜「何ですか？これは…」

茜が城庭につくと、そこには茜そつくりな二人の男がいた。正確には、一人が倒れておりもう一人は頭から地面に突き刺さっていた。

そして茜はこの二人に見覚えがあつた。

茜？1「いたた、失敗しちやつた」

茜？2「動けない…」

すると倒れていた男の子起き上がつた。突き刺さつている方も無事

「うーん。

茜「縁に……紫鬼兄さん？」

茜1? 「え?」

茜2? 「…………茜?」

茜の脳裏に一人は反応した。

茜1? 「茜お兄ちゃん…？」

茜「やはつ縁なんですね」

茜1? 「茜お兄ちゃん!」

倒れていた男の子、縁は茜に返すべく突然茜に抱き付いた。

縁「茜お兄ちゃん…会いたかった……」

茜「状況がよくわかりません」

茜は突然の事に少し混乱していた。

茜「どうして？」

茜「どういえます？」

ズボツ

そう言つて茜は地面に突き刺さっていた男、紫鬼を引っ抜いた。

紫鬼「ありがと……茜」

茜「まあいいですが……どういえず状況を説明して下さい」

茜は一人から話を聞いた。茜の兄弟は茜同様に様々な世界に行っているのだが、その全てが手伝いか遊びに行っているだけである。今回一人がこの世界にいるのは、兄弟全員が茜がこの世界に来る前の世界に行つて茜が旅立つたのを聞いて手伝いたいと思つたからである。その際茜の用に空中に出て来て縁は受け身をとつたが紫鬼は失敗して頭から落ちたらしい、それで死なない二人もあるいみ茜同様に規格外である。

因みに他の兄弟は残つて遊んでいるらしい。

茜「つまり一人は私の手伝いに来てくれたんですか？」

縁「うん……」

紫鬼「そう言つた事になるね

茜「そうですか…ありがとうございます。一人がいれば心強いです」

そつ言つて茜は右手で縁の頭を撫で、左手で紫鬼の手を握つた。

縁「ふわわ…」

茜「…やはり似ていますね」

茜は頭の中で離里思い浮かべながら言つた。

現在、茜達は城の厨房にいる。あの後誰かが来た時のために茜は分身を一体残して城庭から移動した。移動中に縁と紫鬼にはこの世界の事を話しておいたのでそこがどういう世界かは既に知つている。

茜「それでその仲間がもうすぐ来るので一人には料理とお菓子を作つてほしいんです」

紫鬼「なる程ね…わかつたよ」

縁「僕もわかつた。美味しいケーキを作るね」

茜「ありがとうございます。後で呼びますのでその時にみんなと自己紹介してください」

二人「わかつた」

それを聞いて、茜は離里の所に戻つていった。

茜「どういわけなんです」

茜はこれまでのことを全員に話した。

星「なる程、そういう事ですか」

真桜「ちゅうか頭から地面に突き刺さるなんてありえるんか…? ?」

沙和「普通ならありえないの一？」

茜「そこは私の兄弟だからといつ事で…」

そう言つと何故か全員納得した。

茜「それで納得されるのも少し複雑ですが……」

風「ですが規格外な事は変わりませんのでー」

茜「……否[定]出来ません」

稟「とりあえず、ここの料理は茜殿のこ兄弟が作つたんですね？」

茜「はい、料理を紫鬼兄さんが、お菓子は緑が作りました。それで
は一人共自己紹介してください」

そう言つて茜は一人の方を見た。

紫鬼「僕の名前は紫鬼…説明してもらつた通り、僕は茜の兄だよ…」

最初は紫鬼が名乗つた。

紫鬼「ん？」

離里「ひつ……」

すると紫鬼は何故か離里の方を向いた。

紫鬼「あ……ひつきから震えてくるけど寒いのかい……？」

そう言つて離里の方に近付いていった。

離里「ひつ……」

だが離里はすぐに茜の後ろに隠れてしまった。

茜「どうしたんですか？ 畦里」

茜が聞くと、

離里「怖い……」

離里はぼそりと呟いた。「これ聞いた紫鬼は、

紫鬼「…………」

無言のまま部屋の隅っこ歩いて体操座りしていじけてしまった。

真桜「げ……元気だし紫の兄さん、ウチらは紫の兄さんの事怖ないから（ホントは怖いけど……）」

真桜が紫鬼の事を慰める。

紫鬼「そうだね」

真桜「立ち直り早！」

紫鬼は直ぐに立ち直った。

茜「こんな風に紫鬼兄さんは見た目に似合わず中々面白いんです」

紫鬼「それ……誉められてる?」

茜「はい」

紫鬼「じゃあいいや……」

「のやうどつを見ていた全員は、

全員「…………」

紫鬼の事を少し哀れみの目で見ていた。先程まで泣えていた離里までもが紫鬼の事を哀れんでいた。

茜「では、次は縁です」

縁「う、うん……」

そつと縁は少し前に出た。

縁「ほ…僕は縁と言います、茜お兄ちゃんの弟です……」

縁はおずおずとしながら自己紹介をした。

思春「ん?」の感じ「ど」かで見たことが……

すると先程まで一言も喋っていなかつた思春が喋り出した。

茜「ああ、それは離里の事ですね」

離里「へ？」

離里は突然自分の名前を出された事に驚いた。

茜「離里、ちょっと緑の隣に立つてくれますか」

離里「は、はい」

やつ言ひつと離里は緑の隣まで歩いていった。

茜「ほら、」の二人なんとなく雰囲気が似ていますよね」

全員「確かに」

二人「あわわ…（ふわわ…）」

此処に新たなコラボが誕生した。できれば「はわわ」もコラボさせたいです。

茜「今何か聞こえた用な…まあいいです、それでは食事を…と、その前に」

やつひつと茜はこつのかたち直つた貂蝉の方を向いた。

茜「貂蝉、しばらく部屋を出でください」

貂蝉「えいっ！」

茜「コレ、何て読みますか？」

そつひつと茜は空氣と書かれた一枚の紙を出した。

貂蝉「へへつきだけど……」

それを聞くと、

茜「やうですか……『睡眠呪』」

フシコーン

茜は睡眠呪で貂蝉を眠らせた。

茜「読めるなら出て行つてください、食欲が失せます。誰かある」

兵士「はー。」

茜「口内をじりかに運んでください、なんなら捨てもかまひません」

兵士「はー。」

兵士は少し嫌そうな顔をしながら貂蝉を引きずつて行つた。

茜「それでは食事にしましょうか」

何事も無かつたかの間に全員に会つた。

全員「…………」

茜「どうかしましたか?」

全員「なんでもありません(ないで)(ないのー)ー。」

“ひやらスルーする事にしたよつだ。

全員「ご馳走様でした」

緑・紫鬼「お粗末様でした」

真桜「それにしても紫の兄さんが作ったこ焼き、美味かつたな～」

沙和「どりあつていうのも美味しかったのー」

凪「かれーというのがよかつたです」

三人は満足そうな顔をしている。因みに星はカツ丼、稟と思春は刺身、亞莎はナポリタン、風と雛里はケーキが気に入つたらしい。

茜「一人共また腕を上げたんじゃないですか？」

緑「茜お兄ちゃんに比べればまだまだだよ」

紫鬼「これからも頑張るよ……」

そつ言いながらも、二人は嬉しそうな顔をしている。

星「主は料理も出来るのですか?」

茜「一応二人に料理とお菓子作りを教えたのは私です」

縁「茜お兄ちゃんのは僕達よりも美味しいんだ」

紫鬼「茜が100点なら、僕達は88点だね……」

星「それはすごいですね」

真桜「ウチは兄さんの料理食べてみたいで」

沙和「沙和も食べてみたいの……」

凪「私も気になります」

稟「確かに、この料理も美味しかったですらね」

風「これより美味しいなら風も気になります」

亞莎・離里「茜様(ご主人様)の料理……」

思春「…………」

全員、茜の料理が気になるらしい。

茜「でしたら今度作りましょうか?」

全員「是非お願いしますーーー！」

全員が声を揃えて言った。

茜「わかりました、それと思春、報告をお願いします」

思春「は！」

思春は一枚の紙を出し、茜に渡した。

すると睡眠呪で眠らせた筈の貂蝉がやつてきた。

茜「どうせ呪こも裸足で逃げ出したよつですね、ですが一度いいです」

茜は思春に渡された紙を見ながら言った。

茜「やはりそうでしたか……皆さんに聞いてほしい事があります」

茜「私と貂蝉意外は知らないでしょうが、私がこの国の太守になる前に黄巾党が攻めて来たんですが…その中に二人の少女が混ざつたんですね。それも人質という感じではありますんでした」

貂蝉「アタシの事をキモイとか言つた娘達ね、全く失礼しちゃうわ」

全員「（それは普通だな（です）（なの）（やド）……）」

茜「まあそれは置いて…捨てといて、気になつて思春に調べてもらつた結果、三人は黄巾党の首謀者、張三姉妹でした」

全員「ふ――――!」

茜の口から出たとんでもない言葉に、全員はお茶を吹き出した。

茜「それと三人を仲間ににするつもりです」

全員「えええええ――――――!？」

茜の口から更にとんでもない言葉が出て、全員は絶叫した。

茜「理由なら三つあります。まず一つ目ですが、彼女達は元々は旅芸人だったのですがある日何らかの方法で好評になりました。私が黄巾党の兵士を貂蝉を使つてじつも…尋問して手に入れた情報によると……」

言い直したある物凄い発言に全員がひいているのをよそに茜は話を続ける。

茜「張三姉妹は追っかけに対して歌で天下をとると言ったのですが、追っかけはそれを天下を統一すると勘違いして暴動を起こして彼女達も止められなくなつて黄巾党となつたんです。つまり彼女達は加害者ではなく被害者です。だから私は彼女達を助けたいと思つたんです」

茜の話を聞いて全員は、なるほど…と思つた。

茜「一つ田ですが、彼女達の能力を使おうと思つてるんです」

稟「そつまつ事ですか…」

稟を始め、軍師組は茜の言おうとしている事がわかつた。

星「お主らはわかつたのか?」

稟「黄巾党はそもそも三姉妹の追っかけが暴動を起こしたものですね」

雛里「暴動を起こした追っかけの人達は三人にも止める事ができず に黄巾党になりました」

風「ですが、お兄さんならその心配はありませんのでー」

亞莎「茜様なら追っかけを抑える事が出来るのでその追っかけを兵士にするつもりなんです」

茜「はい、100点です。あの人を集める能力は中々のものですのでそれを使わせてもらおうと思つたんです。幸い、三姉妹の正体を知つてるのは私達だけです」

風「どういふことですか?」

茜「私は偶然三人を見たからいいですが、黄巾党は私意外では情報を漏らした事が一度も無いので誰も三姉妹の正体は知らないんです。因みに現在の黄巾党首謀者の想像図はこれらしいです」

茜が懐から想像図が描かれた紙を取り出した。そこには身長3mはあるうかと言う鬚を生やした凶暴そうな大男が描かれている。御丁寧に腕は8本、足が6本、頭に鋭利な角が3本、長い尻尾も生えていた。

全員「(ありえない……)」

茜「つまり世間の認識など、この程度と言つ事です。これなら仲間にしても情報操作で何とでもなります」

全員が茜の説明に再び納得した。

茜「最後に三つ田ですが、個人的にはこれが一番の理由です」

真桜「それで、その三つ田はなんなん?」

茜「皆さんは知っているでしょうが私は元々つながりを守るためにこの世界に来ました。少し見ただけですが、彼女達のつながりは見逃していいものではありませんでした。くだらない理由でしょうが、これが私です。笑いたかったら笑ってください……」

茜の声が段々と小さくなっていく。正直、茜の考えは甘いだらけ。

星「私達は主について行く事を決めています」

稟「茜殿に口出しあるつもりなどあつません」

風「寧ろその方がお兄さんらしいです」

凪「私は茜様のやう言つ所に憧れたんです。私はまだも茜様につれて行きます」

真桜「ウチもついてくでー」

沙和「沙和もー」

亞莎「私も笑つたりなどしません」

雛里「(コクコク)」

思春「茜様のために……戦います」

貂蝉「そつ言つ事よ、『主人様』」

だが茜の事を笑う者など、この場に一人もいなかつた。

茜「皆さん……ありがとうございます。必ず三人を助けましょう、そしてこの世界のつながりを守りましょっ」

全員「はい（なのー）（おひつ）……」

全員のつながりが更に強く結ばれた。

管理者 × イレギュラー × ???

とある場所

? 1 「クソ、何なんだアイツ等は……」

? 2 「落ち着いてください左慈」

? 1 「これが落ち着いていられるか！あんなイレギュラー、初めてだぞ」

? 2 「いいから落ち着いてください、それに彼等について少し調べましたので」

? 1 「なら、せつせとと言え」

? 2 「せつかちですね、まあいいでしょう。まず赤髪の人は姫神茜、緑と紫の人は兄弟の姫神紫鬼と姫神緑、そして姫神茜の発明品口ボガミ、問題なのは能力です」

? 1 「能力？」

? 2 「まず口ボガミは一応リミッターがかかって強さは半減しますがそれでも一騎当万の強さを持ち魏の夏侯元丈にも圧勝したようです」

? 1 「あの夏侯惇にか？」

? 2 「はい、次に姫神縁と姫神紫鬼ですが彼等もこの世界に来て力がかなり半減しているようですが十分な強さ持つでしょう。特に姫神紫鬼は呂布と同等かそれ以上の力を持つでしょう」

? 1 「何！呂布を越えるだと！」

? 2 「彼等はまだいい方です、問題は姫神茜です」

? 1 「そこまで厄介なのか？」

? 2 「はい、まず武力は力は抑えてはいますが家をも持ち上げ速さも抑えてはいますが神速の張療が赤子に見えるほど、まさに本物の神速です。勘も鋭く殆どの攻撃を初見で見切る、本気を出せばたとえ呂布が百人いたとしてもそれこそ赤子をひねるかの用に圧勝するでしょう」

? 1 「……」

? 2 「そして知謀はたぶん賢者、太公望も頭を下げるほど万能な考え方をするので北郷一刀のように策にかけるのは無理でしょう」

? 1 「……」

? 2 「そして最後に彼の人間性、劉玄徳のような大徳に曹孟徳のようなカリスマ、これらが人を引きつけてどんどん力をつけていく、近いうち三國全てが彼の仲間となるで「もういい」よろしいのですか？」

? 1 「聞くのも馬鹿らしくなる、何だその完璧超人は？」

? 2 「実際私達が全力でかかったとしても、彼等に勝てる確率は1厘（0・1%）あれば奇跡ですね、故に上もあきらめかけてる用なのです」

? 1 「上がか？」

? 2 「ええ、どうやらあの外史は本来出来るはずのなかつた者らしく、いわばレアなものなんです。出来れば手に入れたい用なのですが彼等を見て諦めかけてるようですね」

? 1 「なら俺たちは何をするんだ？」

? 2 「いつも通り倒すだけです。手に入れられるなら手に入れ、無理なら諦める、それだけのことです」

? 1 「なる程、だが奴らがいるいじょう迂闊にては出せんぞ……」

? 2 「実はその事で面白い物を見つけました」

? 1 「面白い物？」

? 2 「ええ、どうやら五湖の方に彼等意外のイレギュラーがいる用なのです」

? 1 「何！他にもイレギュラーがいるのか！？」

? 2 「ええ、ですがそのものは彼等とは違つてなにやら黒いものを感じまして、うまくいけばつぶし合つてくれるかもしませんよ」

? 1 「つまり、つぶし合つようにならぬるのか……ふん、相変わらず陰

温なやり方だな……」「

?・2 「ふふ、讃め言葉として受け取ります。ですが、まだ早いです」

?・1 「どうした事だ?」

?・2 「まだそのイレギュラーにてなにも知りませんのでね、まずは情報収集ですよ」

?・1 「だが狙い通りに動くとも限らんぜ」

?・2 「その時は、打ち負かして引き込むだけです」

?・1 「なるほどだな、それでいつ始めるんだ」

?・2 「二国は彼等によつて必ず集まる筈ですからそその時になつたらイレギュラーのもとに行きましょ。それまでは情報収集です」

?・1 「なじきつてここへ

?・2 「ふふ、どうも

茜たちの知らない場所で、物語の歯車が今、動き出した。

五湖

?1 「.....」

?2 「.....」

?1 「誰か来たね.....」

?2 「そうだね.....」

?1 「どうする.....？」

?2 「何でもいいよ.....」

?1 「じゃあほっとく.....？」

?2 「そうだね.....」

?1 「ただし.....邪魔な用なら消す.....」

?1 「僕達の世界の為に.....」

?2 「僕達の未来の為に.....」

?1 「僕達だけの理想郷のために.....邪魔な物は.....全て消す.....」

.....」

お知らせ

いつも、作者の西です。

突然ですが、明日から携帯を解約する事になる「かも」しれないの
で続けられなくなるかもしません。

駄文ながらも呼んでくれた方は大変申し訳ありません。

14日になつてもこのお知らせが消去されていないか、この小説事
態がなくなつたら解約したと判断してください。

また携帯を買えたら、同じ作者名で再び書かせて貰いますので、そ
の時は駄文ながらもまた読んでください。

今までありがとうございました。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5560q/>

真・恋姫無双～つながり伝～

2012年1月12日22時49分発行